

訴訟だ、まけても構はない、やるべし、やるべし、面白い、面白い」

「その一面また我々、あらんかぎりの知己朋友を集めて、どうだい、出来るだけの金を男子倶楽部の輻重部へ送らうぢやアないか」

「愉快、愉快」

「我々が知ッてるだけの顔を説き廻ッて一個年間の交際費を集めても、尠くないぜ」

「もし足らなきやア身を以て任ずるの覚悟で、おのゝ志願兵に出るんだよ」

「しかし家で嗅アと衝突して、また運わるく戦場で二重の衝突は聊か閉口だな、少々

まゐるぜ」

「なアに君、敵となれば嗅アも何もあつたもんか、それこそ所謂大義は親を滅すべしだ、寧ろ平生を思ひ知ツたかといふ勢ひで、ぎゆうゝいはしてやるのさ、他人でないだけ、猶更憎いよ」

「實は可愛さ餘ッてかね」

「おいゝ諸君、此奴、いかんよ、この際かういふ弱音を吐く奴だから、いざとなれば最も嚴格な監視の必要があるぜ、どうも此奴、先刻から黙ッて居たよ」

「そりやア君、養子だよ」

「はゝア養子か、去り状を書いて自分が追ひ出される方だね」

「いや、たとひ養子でも僕は決して嗅アのために追ひ出さるべき養子でない」

「どういふ養子だ」

「夫婦養子」

「うまく遁げたぞ、兎も角も差當ッて即座の罰金、百圓を申し付けろ」

「賛成、賛成」

「多数決、多数決」

「百圓は酷いよ諸君、半分々々、五十圓」

「いけないぞ」

「吝な養子根性を出すな」

「あとの五十圓は噂アに相談する心算か」

どツと一時に笑ひながら、どやくと四方より取圍んで、互に知り合ひの悪戯半分なれど金は實際の徴収、ポケットより持ち合はせの小遣七十一圓五十三錢の端錢まで巻きあげて、その日の晚餐會に再び婦人俱樂部を攻撃の大氣焰、

## 其十三

老いて元氣ますます盛んに世の中へ飛び出す當世流の老爺あれど、これは退いて自己を知る老後の計、幸ひ取り外さず思ひ通りの樂隱居、

「婆アさん、芝の娘は遅いね、まだ來ないのか、何をしてるんだらう、今朝ア早く來

いと言ッてやツたに、どうも此ごろの若いものは老人を馬鹿にして、いけないよ、つまらない自分の勝手な事には、きやつくと火事で遁げ出すやうに騒ぎながら」

「さうばかりでもありませんよ、何か手の放されない急用でも出來たんでせう」

「急用は乃公の方だよ、急用だから來いと、前夜わざと使ひを遣ッて置いたに、今朝まだ來ない」

「今に來ますよ、閑暇な身體で待ッて居ると、思ひの外に長いものさ」

「大體、何だね婆アさん、あれも尋常で止めて置けば宜かつたに、つい出來るとか惜しいとか世間に囃されたもんだから、うかく難しい女學校を卒業させて仕舞ッて、とんでもない事をしたね、商賣人の嫁には餘計な學問を、させ過ぎたよ」

「今更そんな事を、ほゝゝゝ悪い事を、させ過ぎたンでもありますまいよ、ほゝゝゝ」

「いや、今となつて見ると、あまり宜くない事を、させ過ぎたんだよ、二人の兄は男でも商賣一途の正直で氣の優しいもんだが、末に生れた娘は、どうも女に似合はず氣が強クツて我まゝで困る、第一に婆アさん、汝が甘く育てたんだぜ」

「おやく、今度は私の方へ矢が立ッて來ましたね」

折しも門口へ俵の楫棒を卸せし音、老爺それと耳を欬て、婆を顧み、

「婆アさん、あれだ、錢が安くッて便利で早い電車といふ結構なものがあるに、わざわざ高い錢で、俵を飛ばして來るんだからね」

「どうせ他人に嫁ツたもんだから、俵ぐらゐる宜いちやアありませんか、そんな叱言は、お止しなさいよ」

門口に帳場俵を待たせて、すツと入り來りしは、なるほど店賣商人の妻として案外の晴がましい大ハイカラに金縁眼鏡、色白優形の年輩二十三四、華奢を誇りし流行の衣

裳風俗、まさか常着でもなければ、これが第一の裝飾でもなし、

「お父さん、今日は、おツ母さん過日は有難う、あれで私、どんなに便利を得ましたか」

「婆アさん、また汝、何か内證で送ツたんだね、嫁に遣ツた家へ物を送るには氣を付けなさいよ、却て先方へ善くないから」

「なアに良人、これがね、小さい時に着た友禪の長襦袢がありましたから、ねエ、また使ひ途があるだらうと思ツて」

「そりやア、どうでも宜い、宜いが婆アさん、乃公は今日、これに改めて談話があるからね談話の濟むまで暫時、そツちへ往ツて居なさい、ぐづく横合から口を出しちやア面倒だ」

無理に婆を追ひ退けて、じろく、今更我子の顔を打守りし老爺、苦蟲を嚙み潰せしが

如し、

「大變に待ツて居たぜ、遅かつたね」

「いえ、ちよいと丸の内へ用があつて、寄りましたからね、つい遅くなりましたして、しかし何の御用ですの、前夜、わざわざお使者で」

「丸の内は何だ、丸の内に親類も何もありません、なかつた筈だが」

「ほ、親類がなくつても、用はありますよ」

「どういふ用だ」

「お父さんの、聞かなくつても宜い用ですよ」

「いや、丸の内といへば是非とも聞く、丸の内の、どこへ寄つた、何といふ人の家だ」

「困りますねエ、お父さんが何も、そんな事を」

「は、ア、親が呼びにやつた用よりも大切で、親にもいへないところへ寄つたのかね」

「まあ、お父さん、今日は、どうなさいましたの」

「どうもしない、いくら年を取つても乃公は乃公で、どうもしない、しかし汝は近ごろ、どうかしては居ないか、尋常ぢやアなからう」

「何のこつてす」

「丸の内に、婦人倶楽部とかいふ、料簡の間違つた馬鹿な氣狂ひ女の寄合場所があると聞いたが、そこへ寄つたんだらう、どうだ」

「あ、わかりました、それで今日、わざわざ私を、お呼びなすつたんですね、道理で先刻から、をかしく變だと思つて居ましたよ、なるほど、始めて分りました、お父さん、良人が何か、お父さんへ内々で頼んだのでせう、ほ、自分の妻を自分の人格上で、どうにも出来ない人ですからねエ、また出来るだけの事はして居ません」

よ、實は、お父さん、私の方から御相談したいと思つてる事が」  
 「な、何だと、も一度、言つて見る、自分の妻を自分でどうも出来ない、出来るだけの事をして居ない、全體そりやア何といふ事をいふんだ、その日を暮し兼ねて夜遁けをしたり首を縊つたりする人間のある世の中に、飢ゑず凍えず無事に三度の御飯をくはしてくれる亭主が、どこに不足ある、第一その立派な風俗は誰が作つてくれたんだ、眼も悪くないに金縁の眼鏡をかけて、乃公なんか名も知らない當世流行の衣裳で、ぴか／＼光る指輪を指して、前か後か急に判断の付かないやうな大きな束髪で、商賣人の嫁には見ただけでも入らざる贅澤を並べて、さんざ亭主を弱らした證據だ、あゝいふ氣の好い亭主なればこそ、汝のやうな我まゝものを今まで文句もいはずに持つてくれるんだぞ、少しの本を讀んだり字の書ける事が、どれほど亭主を助けて家のためになつてるんだ、それを有難いとも思はず、出来るだけの事をして

てくれないとは何だ、まだ其上それで飽き足らず、馬鹿にも事を缺いて丸の内へ亭主を粗末にする相談しに行くとは、あきれ返つて物も言はれない奴だ、今日といふ今日、乃公が汝の亭主に濟まないから、あらためて汝を謝罪に連れて行くんだ」  
 「お父さん、外の事と違つて、いやしくも私の一身に關する事です、生涯に關する事です」

「私の一身に關する事だ、汝の一身に關する事を他人でもない現在の親と亭主が差圖するに不思議はあるかい、凡そ物の間違ひにも思ひ切つて大膽に間違つた女だ」  
 「いえ間違つては居りません」

「間違つて居ない」

「はい、決して間違ひません、親と子の間は兎も角、良人と妻との間は、お父さん、さういふもんぢやア御坐いませんよ、なるほど犠牲を以て婦人に強ひた野蠻時代の

舊思想からいへば妻を良人の占領物と見るかも知れませんが、人類の向上した今日、良人は妻の使役物でないと共妻も良人の使役物でなく、つまり雙方の合意的になつたもので、いづれか一方に要求の満足しない點があれば、何時でも立派に正當に差支へなく離婚の出来るものです、お父さんが私を今の家へ嫁にやる時は、まさか前途に我子の不幸を祈つた理由でも御坐いますまいが、今の私としては最も人生に不幸なる妻となつて居りますよ、お父さんは只物質上ばかりを見て、私を舊式の女大學流で、お叱りなさいますが、人はパンのみで生きて居れません、衣食住以外に生命の慰安といふものがなくては折角の存在も、あはれむべき無意味に終りますからねエ」

「さア其、女として、嫁として、その終り場所が外にあるかい、亭主の家が現世で安樂往生の終り場所だぞ」

「困りましたねエ、お父さん、私のいふ事が、さつぱり」

「こら、自分の生んだ我子のいふ事が親として分らない道理があるか、さういふ不孝な事を勿體ないとも思はず平氣でいふ女だ、親に不幸なものは必ず亭主にも不貞女に極まつてる」

「それですよ、お父さん、貞女とか、不貞女とかいふのは、男女を先天的の主従と見た論で、良人のために身を賣つて譽められた時代の産物ですから、今日は零ですよ」

「いちく、生意氣な事ばかり吐すよ、どこから理窟を持つて來ても、親と亭主に逆らうて善いといふ道理があるか、全體まア、あの亭主に何が不足あつて、さういふ濟まない事をいふんだ」

「これを委しく遡れば、お父さん、どうしても世間一般の父兄に論及しなければな

りませんから、たゞ簡單に結果だけ、實は、お父さん、あの良人と私は趣味が全然、違つて居ります、大體の性質が、まるで正反對です、つまり夫婦になつたのが人生不幸の最大原因で、いはゞ雙方ともに絶えず心の平和を破壊されて居るんです」

「もう宜い、そんな講釋、いくら聞いても饒舌ツても無効だ、一旦、嫁に遣つた以上、さういふ我まゝは亭主よりも世間よりも第一この乃公が承知しない、とんでもない奴だ、二人の兄の嫁を見ろ、あけても暮れても神妙に感心なものだぜ、他人から來た、あの嫁達に對しても乃公が叱つかしい」

「お父さんは全く、頑固だからねエ」

「頑固でも何でも、道理に二つがあるか」

「道理に二つはありませんよ、ありませんがね、その道理も時代の要求で、つまり進

歩すれば進歩するに従ひ自然に根柢も解釋も違つて來ますよ、よく分るやうに早い例を取りませう、お父さんの若い時、もし何十里何百里に隔て、針金一本で談話が自由に出来るといへば、逆も眞實になさいますまい、これが今、無線電話の世の中です、まだ人間は地の上を歩くものとして、空を飛ぶのは畫に描いた仙人か天女ばかりでせう、それが現在、飛行機で自由に飛んで居ます、これと同じ道理で、お父さんが昔、いくら悪い事だと思つて在らしつても、ずつと進んだ今日の頭腦で見れば、却て反對に善い事となつてる理由もあるんですよ、ですから強ち私を不幸だの不貞女だのと、さう一概にはなりません」

「もう乃公は、汝のやうな奴に物をいはない、どうなと勝手にしろ、すきな眞似をしろ、その代り萬一、うろたへて泣いて來ても今後、決して家へ入れないぞ、さう思へ」

「まあ、お父さん、あんまりです事、それぢやア、あまり酷ですワ、うろたへて泣いて来るやうな事は御坐いませんが、また改めて御相談に」

「相談うけない、第一、親に向ツて相談といふ事があるか、相談とは同じ身分の人と人話が話し合ツて事を極めるんだ、子から親に向ツても女房から亭主に向ツても、お願ひ申しますとか伺ひますとか何とか、いふもんだ、今の若い奴等ア言葉も使ひ方も知らない癖に何を知ツてるい、たゞ人を馬鹿にする事ばかり達者に修行しやアがツて」

「お父さんは今日、怒ツて在らツしやるから無効ですワ」

「これが喜ンで居れるかい」

「いゝえ、怒ツて在らしツては理解力も判断力も自然に薄くなツて、物事の道理が」

「だゞ黙れ、此奴、いつまで屁理窟を捏ね廻すんだ、くだらない口数の多い奴に限ツ

て、ろくなもんはないぞ、今に後悔して食ふ事も出来ず、べそく泣いて来るのを眼に見るやうだ、とんでもない娘を持つたよ、まさか嫁に遣る時、かうでもなかつたに、あゝ濟まない、氣の毒なものを遣ツた、イツそ小さい時分、くりく坊主の尻にでもすりやア宜かつた」

「ほゝゝゝ」

「おや、笑ツたな、親の涙が呵しいか」

「だツて。お父さん、くりく坊主の尻さんは随分です事、ほゝゝゝ、尻さん、ほゝゝゝ」

「笑へ、笑へ、それほど呵しけりやア、いくらなと笑へ、笑ツてるのも今のうちだ」

「私、とても叶ひませんわ、おツ母さん、ちよいと出て下さい、おツ母さん、出て下さい」



「婆アさん、出ると承知しないぞ、第一また出られまい、こんなものを生んで今この場合、のそく、乃公の前へ出られるかい、これの亭主に乃公が申譯ないのと同じことだ、乃公が出るといふまで出る事ならない、これから二人の兄を呼んで来て親子兄妹、揃った上で、あらためて、いふ事がある」

いたるところ新舊の衝突、多少その間に忍び合ひし事も、婦人倶楽部の勃興以來、俄の無遠慮、俄の破烈、一時に大池の水門を開きしが如し、

## 其十四

蓬髮弊衣、悲歌慷慨、易水の寒きを以て快を呼びしもの、今日の時勢に後れて金が物いふ世の中の落伍者となり、政黨の騒動にも棒大のステッキその效用を失ひし壯士二人、下宿屋の二階に質草の矢種を盡きて、過ぎし紅燈綠酒を夢に今は寢覺勝の膝小僧を抱き寝の境涯、これが身代の振ひし最後の奢りに正宗の四合瓶と二枚の焼鯛を嚙りながら、

「おい君、いよくこれが落城の水盃だぜ」

「いたるところ、かう下宿屋の追ッ拂ひを食ツちやア堪らないなア」

「今更悔いて及ばないが、考へて見ると、お互に人生の首途を間違ッて出たよ、やはり人間は何の奇もなく快もなく、鼻ツ垂れ送りに順を逐ッた奴が勝を占めるね」

「全くだ、吹けば飛ぶやうな奴が案外、うき世の風にも吹き飛ばされず、紳士とか何とか吐して押廻る今日この我々は、どうだい、なけなしの財布を叩いた瓶詰の冷酒で二枚十銭の鯛を嚙ツて、あはれなる哉、もう天下の談論風發でもあるまいよ、宿昔青雲の志は泥溝板と共に踏み外して仕舞ツた、はゝゝゝ」

「仕方がない、運を取り損ツた後の祭禮だ、働くにしても働き場所と時代が悪かつた

よ、我々以前の壯士は意氣相投じた知己のために怒髪帽子を突貫いたもんだが、お互の頃は既に政黨腐敗の極で、ぐる／＼猫の眼のやうに日に幾度となく變る奴を相手に働いたんだからなア、いはゆる犬骨を折つて鷹の餌食さ」

「已むを得ないよ、舉國一致の熱狂で、日清日露の大戦争に不具者となつた廢兵さへ、もはや再び涙で見返るものがなくなつたからねエ、まだ我々が五體の満足だけ僥倖だ」

「僥倖ついでに、どツか、この身體の面白い置き場所が無いだらうか、我身ながら實に持て餘して來たよ」

「もう君、かうなツた以上、面白い置き場所は無いね、たゞ面白い捨て場所を探すのさ」

「なるほど、置き場所でない捨場所だ」

「ま待てよ、まてよ君」

「どツか、あるかい」

「ある／＼ある、大ありだ、あゝ天いまだ我々を捨てずだよ、あるぜ、あるぜ」

「ど、何所にある」

「おい君、此ごろ喧しい婦人俱樂部、あれだ」

「婦人俱樂部、あれが、どうして」

「どうツて君、凡そ今日の天下、あゝいふ面白い捨場所があるもんかね、鏢一文もなく金氣は切れたが、まだ僕も智慧だけは少々、残つてるなア、はゝゝゝつまり君、あの婦人俱樂部といふ奴ア婦人の權能を發揮するといふ旗幟の下に、世の中の男子を相手取つて戦ひを開いたんだからね、我々の主義からいへば、社會の秩序を破壊し家庭を攪亂する惡魔の巢窟だ、しかし敵が敵で、女といふだけに却て男の方は思

ひ切ツた事は出来ないよ、どうしても君、妙な工合で力一ぱいに組めないよ、その思ひ切ツた事の出来ない力一ぱい組めないところが即ち彼等の最も得意で、最も執念深く、ぶうくしく付け込んで來るところだぜ、ね、うかくすると君、こりやア案外、男の方が危い、油断すると君、やられるぞ」

「なるほど、その點が大いに、あるね、寧ろ快濶な男と違ツて、女の世間かまはず自棄になツて來た勢ひは、どうにも手が着けられんよ、第一また女といふ奴ア堪忍力が強いよ、ぱツと眼に起つ活動は無効だが、ねちくと水飴のやうに、ねばりついて來る力は恐ろしいからね、なるほど、うかくすると危い」

「そこだ、君、そこだよ、その手で來られると男は弱いからね、まるるからね、そこで我々のやうな、もう世の中に用のない破れかぶれの男が二三疋、必要だ」

「どうする」

「面倒だ、敵の大將分になツてる女を二三人、とツちめてやるのさ、いくら騒いでも威張ツても、敵の最も缺けてるものは君、腕力だらう」

「愉快、おもしろい」

「今いふ通り相手が女といふだけに却て男の方に思ひ切ツた藝をするものア無いからね、そこへ我々が飛び込んで、遺憾なく腕力を振ツてやるんだ、たいした事はしなくツても、腕の一本か脛の一本、ぶツくちいてやれば宜い、もし濫ツ皮の剥けた奴でもありやア二度と再び男の前へ面の出せないやう、眼鼻を叩き潰してやるのさ」

「たまらないね」

「はした女郎を相手に無理心中する奴さへあるぢやアないか、それから見りやア、いやしくも天下の男子を敵に取ツて戦はうといふ女軍の一團體を相手に古今未曾有の大心中を君、やらかすんだぜ、まかり間違ツて二三人の息の根を止めたところで我

我の死刑、更に悔ゆるところなしだ、このまゝ面白くもない世の中に生きて居て運  
 わるく行倒れでもすりやア區役所の假埋葬だ、寧ろ社會のため人生の衝突問題に一  
 死を賭して働かうぢやアないか、いたるところ冷遇された結果を下宿屋に叩き出さ  
 れるよりやア氣が利いてるぜ」

「や、決心、決心、いよく決心だ」

「天下の男子をして随喜渴仰せしむるに足る藝だ、斷然、君、やらう」

「どうせ今まで女に惚れられた事アなし、義理も人情もないからなアはゝゝゝ」

「實は多少の復讐心も交つてらアね、はゝゝゝ」

「しかし武器は何だ」

「高が女だ、ステツキで澤山だよ、まさか取ツ組むやうな事アあるまいよ」

「もし取ツ組んだ拍子に面でも引ツ搔かれちやア見苦しいぜ、女といふ奴、瓜が利く

からね」

「馬鹿いふな、はゝゝゝ」

「さア飲まう君、いよくさういふ面白い身體の捨場所が出来たとすりやア、落城の

水盃でない、出陣の祝ひ酒だ、大いに飲まう」

「大いに飲めるかい、もう瓶の底だ」

「困つたなア、よし、僕の羽織を飛ばさう」

「飛ばせ、身體にも羽が生えて飛ぶやうな氣のする時だ、一升、やつつけろ」

前には新聞記者の妻として反間苦肉の計を施さんとするものあり、今また言論の自由  
 を以て戦ふべき文明の今日かゝる徒輩ありて、生命知らずに飛び込まんとす、婦人俱  
 樂部に取ツては實に意外の大敵なり、

## 其十五

いはゆる藝術家の藝にあらずして、世間たゞ一口に手軽く藝人といふ、その藝を以て世を渡る男四五人、加之も野太鼓と落話家の前座、狸と鹿の末輩こゝに落ち合うて、やはり互に君と僕との名稱を用ひながら、

「どうぞですい君、此頃の不景氣は、かう霜枯つゞきぢやア迎も遣り切れない、しみじみと身に沁み渡るからね」

「不景氣も不景氣だが、一方また騒ぎも騒ぎだね、物騒な世の中になつたよ」

「それで猶更不景氣が増すのさ、お座敷や高座ア、兎も角、どこへ出かけても近ごろアうまく御機嫌伺ひにならないぜ、わるくすると御機嫌損じばかりだ」

「全くだ、旦那の氣に入りやア奥方が膨れるしね、雌の方へ取込めば雄の方が物にな

らずで、彼方を立てれば此方が立たず、中に氣を揉む身の辛さだ、はゝゝゝかうい

ふ時に、藝人は苦しいね」

「笑ツちやア居れねエよ」

「泣いたツて始まらないねエ」

「泣いても笑ツても、おツ付かねエとは此のこつた、どうか早く納めたいもんだよ」

「天下泰平の御祈禱でもするかね、あまり亂世に用のない我々だからなア」

「また何だツて野暮な騒動をするんだらう、どツちが勝ツても負けても宜いぢやアな

いか、勝ツた女が男になれるでもなし、負けた男が孕むでもなしさ、交情よくすれ

ばするやうに出来て居ながら、喧嘩するたアわからねエ人達だ」

「なアに、たまには喧嘩も善いが、ちよいと我々の仲裁で洒落半分に仲直りの御祝儀と來ねエ喧嘩だからな、聊か念が入り過ぎてるよ、しかし此まゝ見物して居ても、

智慧のないこツた、仲裁は出来なくツても祝儀の方だけ、何とか貰へる工夫は無からうか」

「そこへ気が着くとは、流石に君だよ」

「流石の君も其後が出ない、工夫の種切だ」

「あとは考へ中として置くさ、はゝゝゝ」

「いや拙者に神算鬼謀がある」

「あるウ」

「あるとも、仲間の軍師に其ぐらゐの考へがなくツて、どうする」

「聞いた上で譽めようぢやないか」

「さういふ吝な料簡だから萬事に無効だ、錢は勿論、手に入るこツちやアなし、口で譽めるぐらゐの氣持よく先に拂ツて置くものだ、こりやア實のところ張扇の方で、我

我の畑でないがね、洞が峠を極め込んだよ、筒井順慶、旗色を見て動くより外はないね、をかしく慌て、諸共の敗軍は叶はないよ、いくら卑怯でも無器用でも、かういふ時は二股膏藥に限るぜ、あまり一方へ伶俐ぶツて忠義ぶツて、はツきり爲過ぎちやア後の動きが取れねエ、まして藝人は愛敬稼業だ、どツち付かずのところがいよいよ、喧嘩は御勝手、男子俱樂部も婦人俱樂部も一列一體お客様と見るのが本當だぜ」

「なるほど、一理あるがね、折角の軍師まだ若輩だよ、乳臭い匂ひがするよ、そもこの戦さが何時まで續くか、いつ治まるか知れねエ其間、洞が峠へ陣を構へて居られるかね、馬武器も第一に兵糧が盡きさるぜ兵糧が、洞が峠も宜いが峠の餓死は感心しないよ、ところで僕は考へたね、こりやア我々の仲間で鬮を引くんだ」

「鬮を引いて、どうする」

「男女兩方の鬮引だよ、男の鬮に當つた奴ア今のうち天晴うい奴となつて旦那の方へ取り入るんだ、ね、また女の鬮に當つた奴ア隙さす御臺所へ食ひ込んで置くんだ、ね、さうして置いて戦ひの濟んだ後の御褒美は山分、どツちが取つても貰つても山分とは名案だらう、智慧も絞れば出るもんだねエ、我ながら妙、妙」

「さのみ妙でもないが、時に取つての工夫だよ、戦ひの最中も遊ばず錢になつて、また濟んだ後で山分と來るんだからね、これに極めようぢやないか」

「極まつたとすれば、女の方へ行きたいね、平生は兎も角、狂氣じみた時は女の方が出すぜ、おまけに忠義振が宜くつて戦さが勝つたとなればそれこそ占めたもんだ、女の鬮、女の鬮、さんざ野郎殿に手荒く追ひ使はれて、もし負けたとすれば、眼も當てられねエ」

「注文通りに、うまく鬮が引けるもんかい」

「引けても引けなくつても、僕は女に向つて戦さは嫌だ、生涯それを根に持つて怨まれちやア現世に生きてる甲斐がない」

「さういへば鬮引を省くぜ」

「鬮引を省いて山分だけに這入りたい」

男女兩俱樂部の間一髪に迫りし戦雲は、うき世の風を巻き雨を呼んで、夢のやうなる人間の頭上にまで、響き渡りぬ、

## 其十六

もし魔の神ありて、もし魔の會するところありて、もし魔の神が何をか呪はんとする時の物凄さは、夜更け人定まりて陰々たる闇黒、四方たゞ閃として森々たる鬼氣、かの藤原秀子が婦人俱樂部の奥深き秘密室に三人の腹心を集めて聲を潜めながら私語け

る物凄さにも似たるべし、

この秘密室に藤原秀子と三四人の私語ける聲は、天下幾千萬の男子さらに一人の知るものなく、たゞ或る時機と或る場合に於て何等かの上に現はるゝのみ、

「わかりましたか、いよくとなれば今お話し爲たことが第一に最も大切で、また最も秘密中の秘密ですから、たとひ味方の人達にも決して覺られないやう、わけて此際は内外に細心の御注意を願ひますよ、もし此一事が實行以前に漏れたとすれば、貴女方と私の外に、漏らしたものが無い筈でせう、のみならず折角こゝまで組み立てた總ての計畫が悉く破れる基ですから、この秘密に與つて、この基を守る貴女方は、この倶楽部に對する生殺與奪の權を把つて居ると同じ事です、よろしいか、たゞの幹部員とは違ひますよ、わかりましたか」

「とても、私どもに、それほどの力は御坐いませんが、今お話し下さいました一事は、よく承知いたしました、いかなる事がありましたも、誓つて秘密を守ります、その外、なほ何か、お差圖が御坐いますれば」

「いえ別段、その外には今お話ししたほどの大切な秘密はありません、しかし敵の方も既に十分の用意が整うて、たゞ頻りに此方の動くのを待つて居るといふ時ですから、いつ何時、不意に衝突を始めるかも知れません、ついては、いよくとなつた場合に、敵よりも寧ろ味方の内で第一に油斷の出来ないのは、我會員中に子のある母ですよ、いかに意志は堅固でも、いざといふ曉、夫婦間に於ける子といふものは、實に怖るべき勢力を持つて居りますからね、また第二に注意すべきは良人の地位と名望と財産のある妻です、かゝる會員は實際に臨んで、あくまで力にする事は出来ません、第三に注意すべきは新聞雜誌その他の社會勢力に直接の關係ある家庭から來た人です、どうかすると秘密は此會員から漏れる恐れがあります、真正面の



敵に當る總ての作戰計畫は、及ばずながら藤原秀子が引受けて任じますから、貴女方三人はなるべく、内を取締つて味方の一致協力を缺かないやう、また外の火を防ぐよりも過つて自火を出さないやう、専心それを願ひませう、其他の事は他の幹部員で、おの／＼分業的にすれば澤山です」

「全く、闇に閉ぢられて居た幾世紀の舊習を破つて、新に我々婦人界の光明となる理由ですから、考へて見ると實に責任の重大な事で、なか／＼うツかりとしては居れません」

「この藤原秀子から見た婦人倶楽部の精神といふものは、今まで男子の犠牲物であつた婦人が、社會の進歩に手を引かれ人類の發達に身を起されて自覺した結果、今度は婦人みづから婦人の神聖を保つがために其神聖の犠牲物となる理由です、いはば今まで餘儀なく、他人に預けてあつたものを新に取返す理由ですから、これを返さ

ないといふ男子の方に立派な罪があります、我々婦人の神聖に對する横領罪ですよ」

「婦人の神聖に對する横領罪、ほ／＼／＼始めて承りましたが、いかにも、きびくとして痛快な御言葉で御坐います事、意味は存じて居つても私ども、さういふ警句は、とても出ません」

「始めは詐欺で奪うて其後は横領です、その詐欺と横領とを人道の上に訴へて、是非とも取戻さねばなりませんよ、つまり今度の戦ひは取戻すについての方法で、まづ訴訟の手續きとでもいふ事になりませう、さしづめ私と貴女方は原告の總代で、満天下の男子は悉く被告です、もし法廷を開いた上は、裁判確定まで必ず未決監に投ぜらるべき筈ですよ、ほ／＼／＼」

深更の祕密室に藤原秀子が皺枯れたる聲を忍びて、さも心地よげに、ほ／＼と笑ひし老

の面には、却て一種の怖ろしき色を浮べぬ、

其後の男子俱樂部また既に戦備を整へて、さア來い來れといふ勢ひ、今は只これ敵の動くを待つのみ、

幹事長の田口雄太郎は敵のために十餘年來の妻を去り家庭を破壊されしのみか、最も敵の目標とせられたる事實の總大將、これに従ふ參謀いづれも亦これ一家攪亂の恨み骨髓に徹せるもの、おの／＼テーブルを圍んで人知れぬ祕密會議、

「もう始めさうなもんだが、なか／＼持重してゐる工合ですな、藤原の婆、どうしたか」

「この様子ぢやア寧ろ此方から進んで戦端を開いた方がよくはありませんか、いはゆる機先を制する上からも」

「いや忍び難きところを今日まで忍んで來て、こゝ一刹那といふ間に急ぐのは策の

得たものでない、機先を制するは別の方面にあつて、先づ敵の仕掛を待つのが第一でせう」

「しかし敵も我の動くのを待ち我また敵の動くのを待つて居ちやアたゞ睨み合ひばかりで殆ど際限がない、敵を討つこと一日早ければ社會を益すること一日早しといふ戦ひです、もはや躊躇する時でない、骨鳴り肉動けり、大いに進んで開戦々々」

「こゝまで戦備を整へて、こゝまで味方の歩調を一致した以上、まさか敗るゝ恐れもありませんまいが、よほど機を見て動かねばならない敵ですぜ、もし一步を過れば天下の婦人に笑はれ天下の男子に向うて申譯のない戦ひですからなア」

「兎も角も幹事長の意見を聞かう」

田口雄太郎、暫く無言に閉ぢし眼を開いて、悠々と迫らざる態度に微笑を浮べしは胸中の成算歴々、既に成れるが如し、

「こゝは他に漏れる恐れがないから、總て露骨に打ち明けますがね、實は數日以前まで、もし敵が向うて来れば何時でも、これに應じて戦ふ決心はありましたが、いまだ其決心に對する必勝の保證は出來て居ませんでしたよ、いはゞ危いこつてすな、ところが幸ひ、兼て計畫して置いた準備は遺憾なく着々と一時に好結果を得て來て、もはや大丈夫です、もう十分です、これまで諸君に幾度か促されて、實に苦しかつた、苦しかつたが自分の苦しいために全局に確信のない事は行へない、明日、あらためて具體的に記したものを御覽に入れるが、まづ試みに今その一例を舉ぐれば、第一に都下の新聞雑誌は十中の八九まで確に安心の出來る味方です、また最も中央の便利を選びし一區に一箇所、若くは二三箇所づつの公開演説場も手に入れて置きました、また或る有力者を説いて、いざといふ曉は機敏の行動を缺かざるため三臺の自動車を戦闘中無代價で俱樂部の常用に借入れの約束も出來ました、また遊軍

として相當の地位財産ある熱誠家百三十八人の一團體も組織して置きました、この團體は一人の力で通常會員の五六十人乃至百人に當るものと見て宜しい、さらに一種の突貫を意味せる進撃の武器として田口雄太郎が聊か諸君に誇りたいのは何でせう、はゝゝゝこれだけは流石の諸君も、ちよいと考へが付きますまい、まして敵は猶更驚くでせう、いや、驚くよりも寧ろ馬鹿々々しく思つて呆れるでせうが、その馬鹿々々しいところが即ち武器で、活動寫眞です」

「活動寫眞」

「活動寫眞が武器になりますか」

「なります、實は今度の戦ひに就いて田口雄太郎この活動寫眞に殆ど財産の全部を投じ更に親友から三萬圓の不足を借金しましたよ、はゝゝゝつまり活動の寫眞館を四個所六ヶ月間の契約で既に借入れ、一切これに要する總ての必要は或る一部の俳優

十七人の準備まで、悉く整へました。この活動は男子俱樂部より無代の觀覽券を市中へ撒き散らして、良人に對する妻の不良なるところ、男に對する女の無禮なるところ、其他あらゆる婦人の缺點と罪惡とを間斷なく遺憾なく日々夜々に寫し出して、いちく具に面白く攻撃の説明をさせるのですが、諸君、どうです、いかに馬鹿馬鹿しくとも早速でも、こりやア案外に効能がありますぜ、は、は、は、もし幸ひに敵の行動がヒルムに入れば猶更以て痛快だ」

六人の參謀、おもはず我を忘れて小兒の如く踊り廻れば、ますます奇策縦横の田口雄太郎、俄に兩手を擧げながら、

「諸君、まだ踊るのは早い、早い、活動寫眞の外に田口雄太郎、も一つ面白い痛快なものがある、しかしこれは秘密中の秘密、靜に、靜に」

男女兩俱樂部、いよくこゝに開戦の形式は、まづ社會の耳目たる都下の新聞記者を

各社一二人づつ四十三人に對うて、懇懃なる晚餐を供せし席上、婦人俱樂部の代表者として藤原秀子の挨拶これ直に砲火を開きし事となりぬ、

人生の一大問題、各社おのゝく相警めて今日まで筆を慎み、世間の喧々囂々たるに拘はらず、たゞ單に通信的の報導以外、いまだ一片の批評論議を掲げざりしが、いよくこれまた争うて明日の紙上より論壇の花と咲くべし、

藤原秀子の挨拶を兼ねし演説の大意、

「御繁忙中わざわざ御光來の榮を賜はりました有難う存じます、婦人俱樂部全會員を代表いたしましたして、こゝに藤原秀子、お禮かたぐ一應の御挨拶を申し上げます、兼て御承知の通り我々婦人の一團は、決して天下の男子方に向ひ、自分の本分と自分の責任を立越えて無理な要求を致すのでは御坐いません、婦人を以て男子の隸屬物とし甚だしきは一種の捕獲物とする或る一部の舊思想家からは、今更に驚いて、殆

ど社會の秩序を攪亂し家庭の破壊を企てる惡魔のやうに呪はれて居りますが、寧ろ我々は更に健全なる社會の秩序を保持し圓滿なる家庭の幸福を増進せんがため、いはゞ男子方に今日までお預けしてあつた我所有物の御返濟を願ふので御坐います、なるほど今までは婦人の教育が不完全で婦人の意志が薄弱で婦人の體質その他の總てに於て、未丁年者に對するが如き意味より、みだりに其所有權を自由に許す事の出來ない點も御坐いますから善意的の保管者として、お預かり下さつたので御坐いませうが、もはや今日では後見者なくとも保管者なくとも自分の所有物を自分で自由に取扱ふだけの事は出来るものと信じて居ります、我々自己を信ずると共に男子方の雅量を信じて居りますから無論、必ず立派に御返濟下さるべきものと思つて居りますが、もしや萬一、もしや萬々一これは彼等に返すべきものでない、彼等より預かつた覺がない、よし預かつたにもせよ、まだ彼等に返濟の時機が早い、なほ暫

らく此まゝにして置かうといふ方もあるやうに考へますから、その方々に向つては勢ひ餘儀なく、要求の手續きを経ねばなりません、どうすれば返して下さるか、どうすれば自分の所有物を取戻せるかといふ、その手續き、その方法を行ふために出來たのが即ち、この婦人俱樂部でございます、どうか以上の趣意を御承知下さいまして、寧ろ御憫察下さいまして、久しく闇黒に涙を呑んで居りました、我々婦人を一日も早く、明るいところへ御引き出し下さいますやう、只管お願い致します、社會に最も高く廣く大にして最も清く正しき公平の職責を帯びて居られます皆さんは決して女子に對する男子方とは思ひませぬ、男女いづれにも與せずして、たゞ人類の自然を判断せらるゝ眞理の使命者と心得て居ります」

以上これが藤原秀子の挨拶かたぐ席上演説の大要、頻りに謙遜的口調を帯びて殆ど泣くが如く乞ふが如く訴ふるが如くなれど、をりくその間に、一種の怪氣焔を伏

せて、天下の男子を人臭いとも思はざる大膽さ、いざとならば何物にも怖れざる態度、知らずや我に驚天動地の秘策ありと、さも冷やかに笑ひたげの顔色、なるほど平凡の婆でなしとは其席に集まりし新聞記者の批評一致、世間の評判は今後の活動にあり、

男子倶楽部の田口雄太郎、その翌日また開戦の形式として同じ新聞記者を招待せし席上の挨拶は、藤原秀子と比べて頗る興味ある對照を演じ出しぬ、

「今日、わざわざ諸君を御招待申し上げるほどの事ではありませんが、婦人倶楽部に對する一種の戦禮上こゝに一應、清聴を煩はし置きます、大體この度の事は我々男子の方から好んで挑發したものではありません、實は女に胸倉を取られた男の體面として、どうも其まゝ凹垂れて居る譯には行きませぬからねエ、はゝゝついで已むを得ず、不意に胸倉を取つて來た其、その理由を聞かうとするので、別に大して深い

考へも何もありませぬよ、しかし諸君、いふ事があれば女は女らしく靜に物をいふべき筈でせう、不平があれば不平を、おとなしく述べて、あゝ騒がずに談話の出来る事です、それを彼等、だしぬけの胸倉主義は言語道斷の沙汰で、怪しからんぢやアありませんか、彼等のため人生いかなる不幸を來すか、既に來したか、現に來しつつある、その證據は別に示す方法も手段もありますし彼等また何等から方法と手段を取つて來ませうから、今度それに就いての一切は、こゝに申し上げる必要もない、たゞ事の起りは我々男子よりでなく、先方様から不意に喧嘩を賣つて來られたといふ事實だけ、まづ社會の耳目たる諸君の頭脳に入れて置いて戴きたい、拙者は敢て議論がましい事を今こゝで演べませぬ、また學者臭い講釋もしませぬ、またしたところ諸君に對しては所謂釋迦に説法だ、寧ろ教を乞ふべき筈の拙者が生意氣な事は申しませぬが、たゞ一言、最も簡單に、最も卑近の例として、婦人倶楽部

の會員なるものは現在將來ともに男子の保護を放れ男子の援助を辭して、悉く立派に生存し得るや否やといふ點に最後の解決を固く信じて居ります、彼等の生育、彼等の教育、彼等の存在、つまり今日までの彼等は全體、何物の寄與に依て保ち得たかといふ事は、男子の方にも相應の必要があつたのだから、こゝで男らしく棒を引いて帳消しにするとしても、彼等が今後の生活上、どうするか、どうなるか、それが心配で、寧ろ哀れでなりません、彼等の理想通りに行はれる世の中は遙の前途、いかに長足の進歩をしても、まづ幾百年の後でせう、もし浮世が女のまゝになれば女よりも一足お先へ自由になるべき筈の我々男子が油断なく間断なく働いて居りますよ、どうです諸君、昔は尻に従へて歩いた女を今日は手を引いて並んで歩くやうにしてやつてるぢやアありませんか、それを彼等これを満足せず、その上まだ男を掻き退けて前へ出しや張らうとは、あまり圖に乗つて、あまり贅澤過ぎて身の分際を

知らざる奴等といはなければなりません、また彼等は男子に向つて何か大切な物でも預けてあるやうに騒ぐさうですが、我々男子は女子の方へ遣り放しのまゝ面倒だから捨て置くものはありませんが、その女子より半襟一つも預かつた覚えはない、覚えのないものを返せとは猶更ら以て言語道断、その僭越無禮の言ひ掛りを懲戒すべき方法手段は、いづれ改めて今後の實行上に御批評を願ひませう」

以上これが田口雄太郎の挨拶かたぐし、席上演説の大要、洒落滑稽を帯びて簡單平易なれど、その間に争ふべからざる人生の事實問題を解決して、加之も恬淡に快澗なるところ、露骨に仔細めかざるところ、いかにも男子的の意氣と男子的の態度とを表はせりとは、その席上に列せし新聞記者の衆口一致なり、

いよく、男女倶楽部の戦端は開けたり、いよく、社會問題の一大活劇は天下公衆の前

に演じ出されたり、

勝敗いづれに歸するとも敵味方いづれに傾くとも、あらゆる階級に時ならぬ波動を起し、いたるところの家庭に多少の風雲を兆して、さらぬも不安の念を抱き恐怖の色に襲はれしもの、おもはず聲を揃へて、さア始まつた、さア始まつた、

時の警視總監、男女兩俱樂部より田口雄太郎と藤原秀子の二人を代表者として招き、加之も丁重なる紳士淑女の待遇を以て殆ど懇談的に何事をか一時間餘の警告を與へ、内務大臣また秘書官をして其場に立合はしめ、總監に口を添へて社會組織上の大體より注意を加へしとの報導、その日の夕刊新聞に一號活字にて掲載さるゝや否や滿都また俄に沸き返りて、そら來た、そら來た、いよく言論ばかりの戦でないぞ、やれやれ、しツかりと遣れ、

我國の歴史上いかなるページを翻しても、戦ひは男子と男子の間に起りしが、今や國內に戦ひの根を絶ちしと共に男子また女子を敵として戦はざるべからず、加之も戦ひは勇を以て決するの快なく死を以て名を成すの譽れなく、互に生きて不愉快に朝夕の顔を睨み合ひながら夫婦は家庭の上に戦ひ未婚の男女は交際の上に戦ふ、寧ろ屍を野外に曝すよりも悲痛慘澹なり、



## 男女の戦ひ續編

## 其一

生物と動物の文字、生きて動くもの既に戦ひの意味を含めり、人は平和を得んがために戦ふといへど、實は人間に永久の平和なく永久の休戦なし、もし平和と休戦を永久の常態とすれば、人間これ生動物にあらずして石塊と一般、社會は進歩もなく發展もなき砂利の置場なり、黄金世界を理想とすれど、黄金世界の理想を其まゝの實際に現出せられて人間こゝに悉く黄金佛となれば、生きて動くべき生存の價値いづこにありや、加之も黄金は黄金にあらずして沙漠に枯木を立並べたるよりも無意味なり、いかに優雅なる詩的たらんとするも、いかに高尚に美化せんとするも、人間は戦ふべき動物に生れ、たゞ戦ひの休せる時を以て平和とするのみ、

常に間斷なき水車の如く、この戦争と平和とを絶えず繰り返して自然の約束に進むべきを人生の一大原則とす、  
男女の間また戦争と平和の外なく、いはゆる戀愛は平和にして、いはゆる煩悶は戦争なり、そもく天下の男女その關係より生ずるところに平和の多きか煩悶の多きか、これを夫婦の間に見るも、家庭の圓滿は愛を保てる平和にして、家庭の悲慘は愛を破りし戦争なり、男女兩性の結婚は終身の契りたるべき異體同心の夫婦さへ、戦はざれば愛し愛せざれば戦ひ、常に絶えず愛情と喧嘩の兩面を以て生涯を送る、互に全身の愛を捧げ合ひしといふは休戦状態に於ける平和の時のみ、その破れたるに驚いて忽ち顔色を失ふは人生の大觀なき道學先生の泣言なり、  
いづれにせよ、人間は戦ふべき動物に生れ、男女の間は猶更ら喧嘩の絶間なく文句の多きものに生る、

幾世紀の今日まで裏面に個々の平和を破りながらも外面さらに大なる社會的の戦ひなかりしは、戦はざるにあらず既に戦うて男子に征服せられし女子の降参なり、されど女子また永久の降参にあらず、兎も角も男尊女卑の事實上に勝敗を決せられて、久しく世の中の闇黒面に押込まれし今日、時勢の光りに乗じ自覺の叫びに旗を擧げ、積る憾みに男の油断を見澄して勃然と復讐的の戦ひを開けり、男また捨て、置けず猪口才なりと引受けて大に邀へ戦ふ、婦人倶楽部と男子倶楽部との戦闘こゝに始まる、

神は始めに草木を造り次に禽獸を造り次にアダムの骨を以てイヴを造りしといへば、次第に段々と試験的の下稽古を積んで最後の成功に手際よく造られたる我々は、凡そ天地間に於て生物中の最も高等にして最も優美なるものなりとは、常に女の男に對する文句なり、

男また鼻を高めて曰く、そもく神の始めて人類を造りし時、第一まづ男を先に造りしが、獸に等しき見苦しき尻尾の生えしたため、これを今更ら切捨てても殘念と心得、その見苦しい尻尾を取って女を造れり、つまり女は男の餘り物にて出來た動物なり、おとなしく尻に隨いて來る外、ぐづくいふべき資格なしとは、常に男の女に對する文句なり、

原始時代の神話に於て既におのく喧嘩を始め、人類いよく生存に争ひ社會ますます複雑に進める今日、いかでか永久の平和を保ち得べきや、男女こゝに其平和を破りて大に相戦ふは、勢ひ人生の避け難き自然の結果といふべし、

加之も過去に於ける宗教と道德の力は過去に於ける人類の平和を保ち得たりとするも、今その平和を破りて其宗教と道德との二堤防さへ將に危からんとする男女衝突の大波瀾は、到底、個々の人力を以て防ぐべからず、戦ひの動物が戦ひの時を得て戦ふ

べき社會となりし以上、もはや既に人生の免るべからざる一大戦争の時期に入れり、その波瀾の治まるを待つて後、あらたに時代の要求すべき堤防を築くの外なし、やるべし、やるべし、するだけの喧嘩をさして男女おの／＼遺憾なき勝敗を決せしめよ、どし／＼やれとは、人間以外の何物よりか下界を見下して叫べる聲なり、

幾世紀の闇中より出でて時代の光明に浴せんとする婦人倶楽部の旗幟文字は、既に普く天下の知るところなれど、これに對する男子倶楽部の旗幟文字を標榜するに當り比較上、こゝに再び掲ぐるの必要あり、

○婦人倶楽部は天賦の權能を遺憾なく發揮し、更に婦人の神聖を保護すべきために起る、

○婦人倶楽部は人類の自然に應じ、社會の大勢に隨ひ、個々の自覺と自信とを以て

精神的に組織せられたるものとす。

○婦人倶楽部は、いかなる場合も絶対に男子の出入を許すべからず、

○婦人倶楽部は、婦人として男子より侮辱を蒙りし場合の最も堅固なる城壁たると共に、最も嚴格なる意味を以て其侮辱に對する手段を取るに躊躇せざるべし、

○婦人倶楽部の會員にして妻たるもの、その良人の門外に於ける總ての品行を監視し若しくは探知せんとする場合は、婦人倶楽部の職責上、これに應じて最も秘密に最も精確に調査し報告する機關を備ふ、

○婦人倶楽部の會員にして妻たるものその良人に對して理由ある離婚を要求する場合は其理由の強き擁護者たると共に清き辯護者たるの任務を帯ぶべし、

○婦人倶楽部の會員にして妻たるもの、その良人より不條理の離婚を強ひられたる場合は倶楽部の全力を盡して之に當るべし、

○婦人俱樂部は會員の初婚たると再婚たるに拘はらず、俱樂部の認めたる範圍内に於て其媒介者となり其保證者となるべし、さらに其後の婦人俱樂部が突如として發せる急激の文字、いはゆる開戦の動員令ともいふべき六個條は、いよゝ世間の耳目を驚かして、加之も文字以外の祕密室に何等かの怖るべきものを藏せりとまで疑はしめたり。

一、從來の婦人俱樂部は或る意味と或る程度とに於て消極的態度を取りしが、今後の婦人俱樂部は如何なる場合も進んで大に積極的態度を取るべし、

一、從來の婦人俱樂部は社會の慣例と家族の風習とを及ぶ限りの自制力に容認せしが、今後の婦人俱樂部は主義の爲に何物をも敵とするの行爲に躊躇せざるべし、  
一、從來の婦人俱樂部は其記名と其會費を以て會員の數に加へ來りしが、今後の婦人俱樂部は會費を二倍として幹部十人以上の決議は、事情の奈何に關せず會員

の名簿より削除すべし、

一、婦人俱樂部の會員にして俱樂部の招集を受けし場合は、人間の不可抗力以外その招集に應ずべき義務を有すべし、

一、婦人俱樂部の會員にして、演説もしくは新聞雜誌その他の著作物に自己の意見を開陳せんとするものは一應まづ其原稿を示すべし、但し言論出版の自由を拘束するの意味にあらず、寧ろ言論出版の自由を奨勵し贊助するの敬意歡迎を以て批評訂正すると共に俱樂部また別に相應の原稿料を支拂ふべし、

一、婦人俱樂部の會員にして俱樂部の信條とせる主義のために生じたる不幸は、社會上に關せず家庭上に關せず一切これを俱樂部の責任として其會員に對する救濟保護に全力を注ぐべし、譬ひ過つて法律上の犯罪者たるとも、犯罪の意味に於て俱樂部の是認するものは、出來得る限りの力を盡して及ぶ限りの援助を與

ふべし、

前に掲げし婦人倶楽部の主意書には、同じ挑戦的態度を含みながらも多少まだ流石に婉曲なる文字を以て其鋒鋷を包めるところありしが、今この檄文に至りては、我國二千年來の闇中より一時に飛躍せし勢ひ、もはや何物にも怖れざる赤裸々に大膽不敵の文字を聯ねて、加之も敵の來るを待たず寧ろ名譽の戦ひに誇りて我より猛烈なる進撃の態度を顯はせり、

これに對する男子倶楽部また冷笑と滑稽の意味を以て、見苦しい尻尾の餘り物で出來た動物ども何を騒ぐというては居れず、わけて敵は急轉直下の進撃態度に向ひ來りし今日、いよ／＼本氣の沙汰に起つて世間へ配布せし印刷物は左の如し、

## 男子倶楽部の主意

我々男子の始めに見たる婦人倶楽部の設立は讀んで字の如く只これ婦人の娯樂的に花の如き優美の會合なるべしと思ひしが、何ぞ圖らん其後の社會に發表せる婦人倶楽部は劍を聯ねたるが如く我々男子に向うて突如たる挑戦的態度を現はせり、加之も我々男子は其挑戦の意味を解するに苦しむ、

我々男子は彼等より戦ひを挑まるゝ理由なしと雖も既に今や挑戦的態度より進撃的態度に移り來れる彼等のため、勢ひ止むを得ず正當防衛の地位に立たざるべからず、彼等に對する名稱の便宜上こゝに我々また男子倶楽部といふ、

男子倶楽部は天下の婦人に對して時代相應の敬意を拂ふ以外さらに何等の要求するところなし、たゞ婦人倶楽部なるものに對しては先決問題として左の數箇條を反問するの必要あり、

(第一) 婦人倶楽部の要求を悉く容れんとする前、まづ婦人に我々男子の手より

離れたる經濟的の獨立を事實の上に望まざるべからず、

(第二) 婦人俱樂部の門前に並列して我々男子の最敬禮を行ふべき前、まづ婦人に向うて我々男子と等しく國家兵役の義務に服すべき總ての完全を望まざるべからず、

(第三) 男女を以て優劣なき人類の平等物とするは固より眞理あれど其眞理を過りて先天的に定められたる人類の分業任務を紊さんとする前、まづ世界各國の醫學上に於て婦人の腦と男子の腦と其構造の一致せる正確の報告を得ざるべからず、最も人間の主要部たる頭腦の廻轉數に多少の相違ある間は社會の組織上より家庭の保安上より我々男子たるもの飽まで婦人の過れる要求を排斥せざるべからず、

(第四) 我々男子は向上進歩のため婦人の自覺なるものを尊重すると共に古き道徳と古き法律とは時代の要求に伴はざるを解すれども、其自覺中に分娩哺育の天職

を無視し其要求中に國家存在の理由を誤解せるが如きは極力これを撲滅せざるべからず、

(第五) 男子俱樂部は婦人俱樂部の如く武裝的の意味を以て自己の理想を颯言するの必要なし、たゞ以上の四個條を以て遺憾なき解答を乞ふのみ、加之も不可能を強ふるにあらず、何となれば以上の四個條を行ひ得ざるものは即ち我々男子と異なる婦人にして婦人の敬意を拂はるべき天職は寧ろ此四個條の外にあればなり、婦人俱樂部の檄文に應じて男子俱樂部より發せし此印刷物以外、いづこの氣まぐれものか、わざ／＼横合より飛び入りて、また別に一種の印刷物を撒き散らせる奴あり、兩々相對して將に戦はんとするの時、いはゆる男子のため最眞の引倒しにして敵に攻撃材料を與ふるの恐れあれど、これを善意に活用すれば一面また竊に味方の元氣を鼓舞するに足る、惜い哉、たゞ文字の上に誠意を缺いて聊か悪戯めいたり、

○昔は、無智文盲なる百姓一揆あり、今は却て生嚙りの學問せる女一揆あり、御厄介なれど我々に代りて御征伐を乞ふ、

○心理上、生理上、いづれの點より見るも男女の優劣は問題になるべからず、全然これ女は種族保存のために出來たる人類の繁殖器なり、彼等が生殖機能の提供以外に何の藝當ありや、たとひ多少の藝當を演ずるとも其藝當また總て悉く男子より劣れるを無理に堪忍して許せるのみ、鶏の卵子を生むと一般の役目を守れば足れり、

○男子その妻にして婦人俱樂部の會員たる不心得ものは、さつさと叩き出すべし、丸裸にして叩き出すべし、もし結婚當時の持參荷物でもあれば本人より其父兄に返すべし、男子に向うて戦ひを開く婦人俱樂部には男子に離れて生活すべきだけの用意はあるべき筈なり、つまり婦人俱樂部は男に用なき女の捨場所なり、或

意味に於て寧ろ其存在を歡迎す、

○婦人俱樂部の勢力いかに強大なりとも、天下の婦人を舉げて悉く會員とすべからざる以上、男子の慰安に何の不自由なし、妻なる名稱は暫らく彼等の持ち去るに任せよ、彼等のために妻の名稱を止めんとするは、寧ろ面倒にして入らざる手数なり、家庭また暫く彼等の破壊するに任せよ、彼等に作られたる家庭は、寧ろ不愉快にして餘計な厄介物なり、わが所有とせる人類の繁殖器を失うて差當り子を生む事は出來ざれど、もし拵へんとすれば妻以外の他にも到るところ自由自在の出産器の便あるのみならず、既に生れし子を養育するに、牛乳その他の滋養物あり、何ぞ必ずしも彼等の乳房を要せんや、寧ろ却て男子の手に養育せられし子の優りし立證は幸ひ今この時にあり、彼等は總ての上に動かすべからざる事實の證據を眼前に示さざれば、何等の理解力も想像力もなきものなり、

○彼等は常に教育の二字を以て男女の優劣を無意味ならしめんとすれど、最高等の教育は不完全なる彼等の頭脳に適せざるよりも寧ろ堪へざるの極、その結果は頭腦潰崩して一種の精神病者たらしむるの外なし、及ぶかぎり彼等の奮勵して受け得らるゝ教育程度は凡そ男子の半を以て特殊の恩恵とし無上の光榮とす、多事なる國家、また彼等に其れ以上の教育を施すべき餘裕なく、わざ／＼金を使うて残忍冷酷に精神病者を作るの好奇心なし、

○彼等は常に不平の最大原因として、國家の公法上と社會の取扱上とに男子と同一の待遇なきを訴ふれども、彼等は第一に國家と社會の解釋を誤れり、彼等は第二に自己の位置と自己の力量とを忘れたり、いかに泣いても喚いても大人の眞似をせんとする小兒に實際の重荷を負はさるべきや、彼等は女それ自身としての大人なれど男子より見たる小兒なり、數千年來の長き文化史上に現はれたる適應の現

象と世界の醫學上の争ふべからざる結果、女子の大人に於ける頭の容積分量は、男子の小兒と殆ど同等にして、もし男子の大人に對すれば比較的にあらず絶對的に小なるものなり、つまり男子の大人と小兒の間に位するものを女子の發達せる一人前の人間とす、遺憾なく發達して猶且つ此の不完全なる人間に洒落でもなく冗談でもない國家の存在と社會の組織を託さるべきや、彼等に男子と同一の待遇を與へざるがため國家は存在し社會は組織せらるゝなり、もし彼等の乞ふがまゝに許せば彼等また其許されるところに自業自得の最後を取らざるべからず、男子の雅量、よろしく今の内に叱つてやるべし、そこまで突き放し見放しては、あまりに可哀想ならずや、結局、女は男の保護物なり、

○されど我々男子の内には却て女の保護物たらん事を天國に生るゝが如く名譽に冀ふ奴あり、かゝる徒輩は戀愛を以て男女の間に生ずべき自然の産物とせずして女



より特別の思召に下さるゝものと有難く心得、歐米各國の外面一重を包める皮相ばかりを瞥見して女の尊ばるゝ國は必ず文明なりと叫び、配合の美を知らずして宇宙の美は女の専有物なりと崇拜し、男の力は女の情によりて發揮せらるゝものなりと感謝し、際限なき同情の下に自己を空しうし程度を辨へざる博愛の下に人生を没却し、事實と伴はざる詩的の下に精神に異状を來し、うかくすれば世界いづれか女帝の國を見付けて歸化人たらしんとするが如きもの、いはゆる真理に觸れたりといふは多く氣の觸れたる奴なり、かゝる奴は既に我々男子の部にあらずと雖も、この際これを捉へて婦人俱樂部の會員と共に一網打盡の懲戒を喫はすべし、潜在なる女子の不心得も實は常に斯かる奴等の提灯持あるがためなり、但し遁ぐれば遁がして置くべし、我々男子は斯る奴等を追ひかける手間に外の仕事をすべき責任を有す、

○たとひ彼等が自覺せりと騒ぎ出す要求中に多少の理由を含める點ありとも、この際は斷然これを跳ね付けて取上ぐべからず、輕重緩急を知らざる彼等に部分的と総合的の差別を解すべき筈なく、つまり寸を許せば尺を欲する彼等のため寧ろ一時の方便に叩き潰すべし、一旦その要求を悉く叩き潰せし後に與ふるを以て彼等に對する最善の好意なりとす、どこまでも女は世話の焼けるものなり、

○結局は男女兩性の異なる天意と原則とを以て總てを解決するに足る、たゞそれまでの間は定めし御多用の中を今日かゝる事に關して、とんでもない暇潰しを男子俱樂部の諸君に謝せざるべからず、諸君何等かそれ女子に崇らるゝ前世の約束なりと締めて當分の御面倒を乞ふ、

男女兩俱樂部の標榜文字以外、その横合より不意に飛入の此いたづらものあるかと思へば、その翌日、また更に案外の世間を馬鹿にせし奴ありて、わざくゝものすきに藝

妓俱樂部の主意書なるものを發表せり、

一、私どもは醜業婦とはいはれ候へども、決して野暮に理窟も捏ね廻さず、腹も立ち申さず候、愛敬専一、たゞ嬉しく楽しく陽氣に騒いで其日々々の樂天主教とやらに營業いたし居り候、

一、もし私どものある故に御婦人方の恥辱に相成候へば、恥を知らぬ私どもを相手となさず、立派に營業鑑札の出どころへ御不足を御持ち込み下されたく候、

一、私どもは此度の男女兩俱樂部いづれにもお味方いたさず候、どこまでも嚴正なる中立態度とか申す地位より失禮ながら面白をかしく見物いたし候、

一、しかし私どもの營業上、お座敷へ呼ばれ候節は、なるべく殿方の御意に叶ひ候やう、なるべく御機嫌を伺ひ御世辭を並べ、また世間より浮氣家業といふ看板お許しの有難さには、もし好いた方があれば遠慮なく惚れ申し候、奥様のある方か

無い方か私どもは一切さらに頓着いたさず候、それが刹那の戀愛といふものにて意志の自由なりと或る人より事あたらしく承り候へども、實は承らずとも昔から平氣に實行いたし居り候、

一、女の男に勝つ工夫は私どもの専賣特許に相成り候、藝當にて、いかなる敵も大概は手の中へ丸め込み海鼠のやうに骨ぬきの祕傳秘法いろく御坐候間、もし萬一御役に相立ち候節は何時にても御教授申し上げ候、但し御教授の間も玉の付くものと御承知下されたく候、

一、また當節の流行言葉に、最も貧弱なる劣等の藝術に御坐候へども、もし女の獨立生活といふものを穿鑿いたし候へば、今日の場合やはり私ども自家の藝術に生きて居るものと相成候はずや、さういふ賤しい業は藝術の部でないと仰せられ候へば、なアに無理に藝術でなくとも宜しく候、ちよいとたゞこの邊お伺ひ申した

ばかりに御坐候、

一、自覺とかいふ事は私どもの仲間にて自殺と間違ひ居り候、或る方の講釋に自覺とは自分といふもの、存在に意味あり生命あらしむる事だと仰せられました、この忙しい最中、そんな難しい小面倒な事は儲置き、これまで私どもの經驗上、あまり自分が高く止まりて深く考へ過ぎた時は世の中さらに何事も面白からず、どういふ男を相手にして喰ひ足らぬ自然たさと癩癩ばかりに追ひ立てられ、つまり死ぬより外に不足の遣り場もない事と相成り候故、自覺は結局これ自殺と致し居り候、お互に寄り合つて現世に生きて居る以上、さう自分の注文通りにはまゐらぬものと諦め居り候、古き事を捨て、新しき事に覺めたりといふ言葉も、二日酔の醒め際ほどにはあるまじくと存じ候、

一、侮辱とか犠牲とか玩弄物とかいふ此頃の喧しい事も、私どもの仲間では全く不

用の言葉に御坐候、打明けたところ實を申せば、まことに相濟まぬ事ながら、私どもこそ常に男子方を侮辱して、犠牲物とも玩弄物とも致し居り候、男といふものの口先ばかり強く偉がり候へども女の仕向け一つで自由自在、どうでもなるものに御坐候、しかしこれは厭な男に向うての事、もし惚れた男には私どもより好き好んで犠牲物となり玩弄物となるが嬉しく、たとひ侮辱されても侮辱されたとは思はず候、生意氣な事を申すやうなれど實際に惚れて御覽あそばせ、惚れたといふ事に嘘も偽りもなく、眞實の愛情には講釋も不足も出るものでなく、めちや／＼に只うれしく樂しきものに御坐候、もし男と女が互に睨み合つて負けず劣らず五分五分とすれば、其間に戀も愛もない道理にて、たとひ世間體に少々は割の悪い事があるにせよ、人の知らぬところで十分の差引は出来るものと存じ候、

一、私どもの仲間にて横着な女は男を何とも思はず、あれは前世よりの約束にて女のために餌を運ぶものと心得居り候、セツセと働いて餌を運ぶものとすれば、なるべく威張らして調子に乗せ、なるべく自慢さして多く運ばせる方、よろしいかと存じ候、

一、私どもの姉さん達は此度の男女兩俱樂部を見て、失禮ながら裏店の夫婦喧嘩よりも馬鹿けたものと心得、あれが野暮の骨頂だと笑ひ居り候、裏店の夫婦喧嘩は近所の挨拶を時の氏神として、土瓶や小皿の破損ぐらゐで相濟み候へども、男女兩俱樂部の喧嘩は女の鼻の下に八字髭が生えて、男の腹から子の生れるまでは逆も納まるまいと申し居り候、

一、兎も角も今日の御婦人方は學問なされただけ世の中の萬事に御損が多く候、私どもは幸ひ文盲に生れ候故、いち／＼物事に面倒な小理窟が付いて廻ら

ず、至極平氣に暢氣に腹も立たず暮し居り候、これが意味なき生命とやらで、あはれなものと思召され候とも、本人の私ども少しも哀れを感じず、いき／＼といたし居り候、

一、もし私ども藝妓俱樂部といふものを相立て候節は、以上を主意書の大體といたし候、どうも論にも齒にもかゝらぬ事は承知の上に御坐候へども、實は論や齒にかけられたくないのが私どもの願ひに御坐候、文學とか何とかいふ高尚な立派な事を書いてある雑誌でさへ、私どもの寫眞が乗らねば、少しも賣れないといふだけで澤山に御坐候、

一、つまるところ、男は表面に勝つて裏面に負けるもの、女は裏面に勝つて裏面に負けるもの、負けたが勝でなく勝つたが負けたでなく、實は強いも弱いも、ないものと存じ候、

現代思潮の衝突を最も大膽なる社會問題の一大活劇に演じ出せる男女兩俱樂部の戦ひに藝妓俱樂部は藝妓俱樂部、どこまでも馬鹿けて罪のない愛敬專一の洒落氣を以て惡戯半分の彌次馬的に飛び出したり、

## 其二

もし心ある畫工に婦人俱樂部を代表せる藤原秀子を描かしむれば、振り亂せし白髪の下に呪ひの老眼を光らして過去幾世紀の無念に閉ぢられし闇黒面より物凄く這ひ出したる妖魔の如く、男子俱樂部を代表せる田口雄太郎は、熱血に溢るゝ巨人の鐵槌を提けて咄々この妖魔を一撃の下に粉碎せんとするの勢ひ、加之も時代の風雲ますゝ急に男女兩性の間を吹き捲れば、社會あらゆる階級の礎盤これがために俄の動搖を來して、昨日まで楽しく嬉しき人生平和の月も花も不安と恐怖の色に包まれぬ、

いまだ我國の歴史には夢にも見ざる男女兩軍の決戦、兎も角も事ここに至りて其勝敗を明白に示すまでは、男女相思の愛も時代の風潮に遮られて戀も情も暫し浮世に用なきかと思ひの外いかなる主義も自覺も男女の戀を隔てゝ情を割く力なく、やはり離れ難き戀は戀、忘れ難き愛は愛、寧ろ戀も愛も猶更深く濃く我まゝ勝手の色を重ねて、たゞさへ男女思想の衝突に薄らぎし徳義と貞操を大膽なる無遠慮に塗り潰せば、今まで仙を憚り世を怖れて心の底に潛みし惡魔は、時を得たりと我物貌に躍り出でし勢ひの凄じさ、下駄と草履を履き違へて狼狽へ出せし生意氣の生物識は只これ有頂天に喜び叫んで曰く、いよく我々の眼前にブライトの自由戀愛を實現すべき世は來れりと、  
ブライトか不埒黨か、いづれにせよ、火事場騒ぎに盜賊の多きが如く、世間この男

女の戦ひに耳目を奪はれて由來の道徳生活に多少の疑ひを起せし結果、さらぬも言語道斷の奴いよく、言語道斷を働いて、すきな熱を吐き勝手な事をする奴、いたるところに微笑を含みぬ、

持合と待合の相違

持合と待合の相違は天地霄壤の差、すべて世の中の持合は圓滿なる夫婦の家庭にあれど、ステーションの待合以外に於ける待合は多く罪惡の待合、晴れて自己の家に逢はれぬ男女の隠れ場所。

その待合の奥深き二階に夏の障子を閉め切りて、互に姿も聲も潜めし男と女、

男は二十七八の當世風、新俳優としても藝の外に面の皮一枚で飯の喰ひ外れぬ容貌を、いはゆるハイカラの標本的に仕立て上げし色白の優形、女も女としては兎も角も美人の部に數へらるゝ二十五六の廂髪、あらゆる虛榮心を流行の粧飾物に盡して、こ

れが正當の夫婦でもなく未婚の男女でもなく遊治郎の藝妓遊興でもないとすれば固より道に外れし戀の曲物、人知れぬ心の横筋違ひに搦み合うて離れぬ太い奴等なり、同じ太い奴も、既に太くなりし以上、女は男よりも猶更容貌の正反對に圖太くなるもの、

「まアこの暑いに、びツしやり閉め切ツてさ、まるで蒸されるやうだ事、少しは風を通しても宜いぢやアありませんか、簾があれば夜と違ツて晝間、さう判然と外から見えないもンですよ、鳥田さんは案外、神経家だ事ね、ほゝゝゝ」

さても此奴、鳥田といふ男、女よりも萬事に聊か遠慮勝の體は、すまぬ心の疚しきのみでなく、たしかに境遇と身分の相違より戀の相手を呼ぶにも奥さんと吐す、おのれの掌中に丸めて自由になる女を奥さんとは、呼ぶ奴、呼ばるゝ奴、どうせ白日晴天の下を避けて、ろくなもンでなし、

「いや、いくら暑くても何でもやはり用心に如くはなし、この方が奥さん、安全ですよ、油断大敵、誰が見ないとも限りませんからね」

「あら、氣の弱い事ねエ、もし誰かに見られたツて私、かうなツた以上、少しも構はないワ、今までと違ツて此頃は、さう心に疚しい事もなく、また不安の念にも襲はれないから」

「いけませんよ、そりやア奥さん、いけませんよ、あまり大膽過ぎて危険ですよ、もし萬々一、不幸にして現はれた時は時で、致し方なく、勢ひ餘儀なき手段も方法も取りますが、それまでは、なるべく用意周到に秘密を破られない工夫が第一です、いかに戀愛が人生の總てを打消す力があツても、かういふ事が現はれて平穩無事を保てるやうな時代は、なか／＼まだ來ませんからねエ」

「ダツて島田さん、いくら用意周到に秘密を守ツても、それは守れる間の秘密で、ど

うせ生涯このまゝに秘密の守り通せない事でせう、もし守り通せるものとすれば私、島田さんの私に對する愛の程度を疑はなければならぬの、なぜ、何故ツて、さうですワ、戀は隠れて忍ぶに情ありとか、また人目の關を越え兼ねし情の道とかいふのは、つまり戀愛を人生の行路に弄んだ舊思想の快樂で、何物も犠牲に供する誠實の戀愛には利害の考へも恐怖の念も容れる餘地がない筈ですからねエ、戀は私、他より犯されもせず比較もされない絶對のものと思ツて居ますワ」

「しかし奥さん」

「あら、奥さん／＼ツて、島田さん」

「でも口癖になツて居ますよ」

「その口癖になツてるのが私、氣に入らないの、まだ島田さんは私に對して、何等か警戒の意味があるんですね、いち／＼奥さん／＼といふ敬語の出る間は、つまり自

衛策のある理由で、うち解けて心を許して在らツしやらない證據ですもの。もし今にも面倒な事になれば、すぐに遁け出さうといふんでせう」

「なアに、さう取られちやア奥さん」

「あれ、また」

「困りましたなア、こりやア數年來の習慣で、今更急に、はゝゝゝ」

「今更急に、どうもならないんですの、やはり島田さんは自分が勤めてる會社の、社長の妻といふ以上に眞實を運べないんですね、つまり社長の妻よりも戀と愛の分量が淺くて軽い理由ですね、もし社長の二字を振廻された時は、戀も愛も捨て、仕舞ひなさるんでせう」

「さう出られては、ますます困りますよ、何も別に、さう難しく、理窟詰にしなくツても、かうなツた以上」

「かうなツた以上ですから私、自分の思ツた事と自分の意に満たない事は、遠慮なく聞いて貰ひたいの、また聞いて下さるでせう」

「聞きますさ、聞く事は何でも、聞きますがね、はゝゝゝやはり困りますなア」

「困るゝゝゝで、どう、困るんです」

「どうツて、さうぢやアありませんか、お互の間にこそ、いふに言はれない、まるで小説のやうな、戀と愛のために、かうなツて居ても、その戀と愛に同情の涙もない世間より見れば、自分の勤めてる會社で、その社長の細君と姦通した島田ですからな、また貴女ア自分の良人が社長として使ツてる會社の社員と姦通した奥さんですからなア、迎も此まゝでは」

流石の太い野郎も今この待合を一步の外に世間の耳目あり法律の制裁ありと思へば、四面包圍の敵中に身を置くが如く、俄に心細くなりし顔色、まだ多少は頭腦の端くれ



に悔悟の念を餘せど、學問に中毒せし女が戀に狂うて身を捨鉢の恐ろしさ、はや既に良心は悉く麻痺して自己が罪惡の屁理窟のみ残り、

「とても此まゝの無事に濟まない、いふんでせう、しかし私は、却て無事に濟まない事を望んで居ますの、先刻も私いふ通り、祕密といふものは祕密を守る間の祕密ですもの、いづれ現はれるのは當然の結果ですから、寧ろ當然の結果に現はれない前、實は進んで現はしたいんです」

「えッ、そりやア、そりやア、どういふ理由です」

「あら、そんなに眼を剥いて、ほゞほゞさう驚かなくつても宜いぢやアありませんか、考へて御覽なさい、外の事は兎も角、薄弱な島田さんねエ、くどいほど常に幾度も貴君に言つたでせう、私は最初から無論、自分の意志でもなく、また全然理想にも叶はない人ですから、遁け廻るやうに嫌といふのを無理に強ひられて、つまり女子の

生涯に於ける幸福も快樂も奪はれて、たゞ物質的の外に眼のない舊思想の親戚や父兄のため、こんな不自然な結婚を寧ろ名譽か何ぞのやうに、今の良人へ嫁せられて仕舞つたんですもの、おまけに私は學校を出たばかりの二十歳で、その時の良人は貴君、もう五十に近い白髪之交つた四十八、まア何といふ残酷です、もし良人を貴君と同じ二十八とすれば、私は生れたまんまの赤ン坊ですよ」

「はゞゞゞ生れたまゝの赤ン坊は宜かつた、はゞゞゞなるほど社長は今年五十四で、貴女が二十五ですからねエ」

「それ御覽なさい、たゞ單に年齢の上から見ても、いかに私が悲惨な運命に囚はれて不自然な結婚を強ひられたか、どれほど私が意志の自由を束縛されて不愉快な境遇に押込められて居るか、わかるでせう、つまり私は途中の餘儀ない事情のためでなく最初から生命のない結婚を壓迫的に強行されて、戀も愛もない人を良人と呼び、

その良人の性慾に供せられてるばかりの妻です、女は男の玩弄物となり附屬物となり或は捕虜となつて甘んじた時代は兎も角、およそ今日の女として多少の希望と自覺とを持つたものに私ほど深刻な悲惨な妻は、あるでせうか」

「なるほど、さういへば今日の女として不幸の極ですなア、結婚の満足は男女雙方の満足なる愛と愛とで成立すべき筈を、強ひて無理に人の妻といふ名を着せられたがため勢ひ已むを得ず良人といふ名稱の下に捻ぢ伏せられて、つまり自分の意志に反した男の獸慾に供せられるんだ、いはゞ一種の暴力を以て絶えず強姦を繼續されてるやうなもんですなア、實は今日まで其侮辱を甘受して來た、貴女の勇氣に寧ろ驚きますよ」

この野郎、始めは心に疾しきが如く、ちよいと一時、おもはず顔色を變へて人間らしく強怖の念に襲はれしが、やはり其會社の社員として其社長の妻を平氣で偷むだけの

太い奴性骨を持つた奴なり、おのれの姦通罪を柵の上にあけて置いて、いやしくも夫婦の間を強姦の繼續とは、

されど夫婦の間を強姦の繼續といはれて、ふしぎに一點これを怪しまぬほど心の狂ひし女、ますます薪に油を注がれたるが如し、

「全くです、こんな生命のない不自然の極に押付けられた無理往生の結婚から、いや貞操を破つたとか、いや良人の顔を潰したとかいふやうな、根柢も理由もない自分ばかり勝手な不足を持ち出されて堪るもんですか、たゞ單純な日々の生活上に興味の違つただけでも夫婦離婚の立派な有力な條件となる今日ですもの、まして私は良人といふものに對する妻といふものを自分で認めることが出來ませんワ、出來ないどころか實際、少しの感じも持つて居ませんの、また貴君と私の間は、一點の偽りも飾りもない人間の本能を自然の要求に應じ合つて、ありのまゝに結び合つた愛と

愛との結晶體ですから、この事に就いては私、自分の心に顧みて疾しくないばかりでなく、たとひ神様に對しても恥づるところは無いと思つて居ますの、まして島田さん、最初から妻でない私が良人でない男に對して、どこに何の恐れも憚りもあるモンですか」

「しかしお互の間に最も危険なのは、不完全なる我國の法律制裁で、妻のある良人が他の女に關する有婦姦は不問に措いても良人ある妻が他の男に關する有夫姦は、その男も共に免れないんですからなア、無論、良人の告訴を待った上ですが」

「なアに島田さん、そりやア大丈夫よ、兎も角も世間で、あれだけの地位を保つてる良人ですもの、いくら口惜しくツても、いくら残念でも、まさか經濟界の五指に屈せらるゝ大會社の社長として、自分の妻を社員に取られた告訴は、出されまますまいさ、新聞に書かれるだけでも、よほどの恥辱で、境遇に堪へられない苦痛ですから

ねエ」

「いや、告訴は起さないとしても、現はれた以上、とても無事には濟みませんぜ」

「では、いッそ、現はれない先に離婚して仕舞へば、宜いでせう、實は私、それを前から考へて居ましたのよ」

「さア、その離婚が實際に於て、なか／＼面倒ですよ、わけて社長は、貴女に、はゝはゝですすからねエ、はゝゝゝですよ」

「おや、まア、變に笑ツてさ、ですからとは全體、何が、ですからですの」

「はゝゝゝ貴女は貴女としたところが、社長の方は、さう手輕に行きませんよ、つまり不自然の結婚といふのが即ち世間の所謂戀女房なるもので、年齢が違へば違ふほど猶更ら以て老後の得難い美妻ですから、めちやく／＼だといふこツてすよ、めちやく／＼に眼が見えないから實は今日まで現はれないんですよ、その社長が、どうし

て、どうして、はゝゝゝ」

「島田さん、私は眞面目なんですよ」

「なアに此方も冗談でなく全くの眞面目で實際、今いふ通り、さうですもの」

「眞面目に貴君、いよくさうとすれば、決して別に難しい面倒もなく、すぐに出來るぢやアありませんか、それには何よりも幸ひ、あの婦人倶楽部ですワ、貴君と私の關係を不利益に悟られないやう、うまく哀訴的に頼み込めば、男子倶楽部に向うて既に戦ひを開かうといふ矢先ですもの、たとひ少々の無理はあつても、不自然な結婚に生涯を埋められ妻が其良人に離婚を請求するといふ事は、寧ろ歓迎されて、寧ろ時に取つての利器に用ひられて、キツと必ず目的を達しますよ、まして良人の地位が地位で世間に知られてるだけ猶更ら此際に於ける婦人倶楽部は喜んで全力を注ぎますよ、いかに親戚や父兄が喧しく騒いだつて一旦、もはや他に嫁せしめた以上

既に親の手を放れたもので、その私が再び家に歸つて厄介にならなければ、たと時代腐敗物となつた過去の習慣性を盾として騒ぐ外に私の身を私の決心を、私の自由を、どうも出来ませんからねエ、無論、貴君は會社を去つてよ」

「そりやア去らずに居られませんか、去りますとも、いくら何でも人情で、まさか、まさかね、二度と社長の顔は見るに忍びませんからなア」

「ほゝゝゝ私は一日も妻と呼ばれて居るに忍びないの」

「見るに忍びないのと、居るに忍びないのと、忍びない同志が今、かういふところに忍び合つてるんですねエ、はゝゝゝ」

「忍び合つてるのも、こゝ暫くですよ、貴君が會社を去つて私が彼家を去つて仕舞へば、もう世の中に忍ぶ必要はありませんもの、たとひ生活上に現在より多少の遺憾はあつても、パンのみで生きて居れない人間が理想の戀と愛を遺憾なく遂ぐれば、

これほど幸福に満たされた幸福はありませんよ、ねエ、ほゞゞ私、早く今の私よりも物質上の不自由をして見たいの、形の上の遺憾を顧みないのは心の内の満足を得んがためです、私として今この指に光るダイヤモンドは貴君の口から捨てた其楊枝の代價に及びませんもの、今の良人が自慢に拵へてくれて他に羨まるゝ化粧室よりも、人の知らない貴君のシャツを洗ったり靴下を編んだりする借屋住居が、どれほど嬉しく楽しいか知れませんワ、考へて見ると戀の神様は一時、わざと私を苦しめて置いて、新に永久の生命を與へて下さるんですねエ」

神聖にして圓滿なる戀の神様も、かゝる場合に、こゝに引き出されては、とんだ御災難なり、はや既に病的となりて一種の悪熱に浮かされし色情狂、人道いづれの方角に當るや眼も見えざれど、たゞ濃艶に男を見上ぐる眼元の媚かしよう、得もいはれぬ情を籠めて我を忘れし身の力なく、その膝に倚りかゝる折も折から、同じ待合の中庭を隔て

し青葉がくれの彼方、かすかに細く低く二階より漏れ来る爪弾の忍び駒、

私とお前と添ふならば、深山の奥の其奥の、竹の柱に萱の屋根、柴刈る手業、糸車、細谷川で布晒す、縫はり仕事いとやせぬ

公園の散歩でもない待合の隠れ場所、ピアノでもない爪弾の忍び駒、この男女二人には頗る調和を缺ぎし不似合の配合なれど、時に取ツての情緒纏綿、いと猶更ら深き印象を與へられて、何となく遠きところへ引き入れらるゝ心地、

「あら、まア、いゝ聲ねエ」

「いかにも美聲ですなア」

「ありやア藝妓でせう」

「無論、素人ではありませんね、しかし昔も今も、戀の情は、やはり同じこつた」  
「いくら古い舊思想から産み出された俗謡でも、いくら醜業婦に弄ばるゝ音楽でも

やはり人の心の琴線に觸れた戀と愛とは少しも現代的に變らない、新らしい生命が宿ッて居るんですねエ、深山の奥の其奥といふんですから、ありやア島田さん、きツと都會の不自然な壓迫に堪へられない男女が、戀愛の理想界を竹の柱や萱の屋根に求めたんでせう、柴刈る手業、糸車、細谷川とは、いかにも能く心の苦痛を訴へ盡して居りますワねエ、つまり或意味に於て今の私等と一致して居る事よ、妙に何等かの暗示を與へられるやうですワ」

わざと閉め切りし夏の二階障子を開けて、そツと爪弾の向二階を中庭の葉越に見透せば、塀の外を通りかゝりし一人の勞働者、おもはず膏汗に見上げて、  
「畜生ツ、正直に働いて食ひ兼ねる人間が居るぞ」

## 其三

文明の戦ひは言論にあり、治世の劍は筆にあり、社會進歩のため人類發達のため向上の指南車を託されたるもの我黨にありと、男女兩俱樂部の間に立ッて武者振ひせる新聞記者中に都下第一の有力を以て聞え記者第一の辛辣を以て聞えたる朝夕新聞社の長田健三、

自己の働くべき舞臺は天下四方に廣く大なれど、身を容るゝ住居は青山の奥に夫婦の外は老若の下女と車夫と主従たゞ五人、その下女も車夫も晝間の疲れに前後を忘れて鼾の聲のみ高く、はや更け渡る夏の夜の一時に近けれど、まだ寝ぬ一室の書齋に電燈を引き下けて机上の原稿紙に萬年筆を走らせながら、背後より團扇の風を送りし妻の定子を振り返りて、

「もう寝たら宜からう、どうせ乃公は遅くなるからね、第一また今夜ア、さう暑くな  
こよ」

「暑くなくツても良人、夜が更けるに従ツて、どうです、こんなに蚊が出て來ますもの」

「いくら蚊が出ても構はないよ、早く寝てくれ」

「だって、寝られませんよ、今、良人の、その筆が、たとひ一時の方便にもせよ、人生一種の悲慘を帯びて私の事に運ぶかと思へば、承知して居ながら何だか妙な氣がして、いふにいはれない、嫌な變な心持になります、ねエ良人、社會あらゆる職業中の最も誇るべき職業ですが、新聞記者といふものは、實に人の知らない、苦痛なモンです、ねエ、たゞ雑報的に其日々の筆を執る記者は寧ろ愉快で暢氣でせうが」

健三、俄に筆を止めて、じつと暫し原稿を見詰めしが、その眼を轉ずると共に身を捻りて膝を向け直しぬ、

「そこだ、そこだよ、自ら任ずる事の深く大なるものは、どうせ他よりも苦痛の多いのが當然だ、しかし其苦痛に、また他より窺ひ得ない高尚な趣味と快樂とがあるんだからねエ、眞面目に自己の天職を以て社會の木鐸たる新聞記者は、時代の要求に適應して最も意味ある今日の武士道だ、その武士道から見れば猶更ら以て今日あの男女倶楽部の衝突を、たゞ一場の演劇に對するが如く面白半分の見物で、自然の成行に任して置く事は出來ない、どうしても一番、こゝは機敷から批評するやうな手續い事ではなく、その渦中に飛び込んで見たいが、直接に新聞記者たる乃公が飛び込めないから、已むを得ず、實は忍びないこつたが、汝に働いて貰ふんだ」

「なアに良人、そりやア過日も誓ツた通り、あまり深刻に同性を謀り過ぎる策ですか、最初は私も多少、驚いて躊躇しましたが、あの婦人倶楽部の主義と違ひ、私は妻なるものを別に一個獨立の婦人とは思つて居ません、或程度と或意味に於て婦人、自由を奪はれたよりも寧ろ或幸福と或慰安のために消滅したものと信じてる以上、

その良人が新聞記者として千載一遇ともいふべき人生問題の活動時機に、幾分か私  
の役に立つのは、妻として良人に信頼せらるゝ私の此上もない満足です、いかに婦  
人倶楽部から誘惑されても、たゞ動かないだけの態度で居たかつたのは、やはり良  
人に對する妻よりも世間に對する私としての立場に重きを置いたからですよ、もう  
今では、これがために譬ひ生涯の世間を失つても、もし一人の良人に捨てられない  
とすれば、それで遺憾はありません、また繰返すやうですが、その原稿へ良人、あ  
らんかぎりの筆を極めて、あらんかぎりの恨みと怒りを盡して、この私を完膚なく  
筆誅して下さい、社會のため人道のため、この私を首尾よく婦人倶楽部の間諜に入  
り込まして、效を奏する基は良人の筆誅にあるんですよ」

「あゝ乃公は良人として實に幸福なもんだ、實に誇るべき妻を持つた、感謝するぜ」

「あら、私に感謝するよりも、良人が社會から感謝せらるゝのを祈りますよ」

「よし、たしかに汝を失望させない、斷じて汝の働きを水泡に歸せしめない、最愛の  
妻を苦しめるだけの効果は、きつと擧げて見せるから、すまないが、やってくれ、  
乃公は男子なるが故に男子倶楽部の味方をするんでない、社會を基礎とし人道を根  
本とする主義の上から、あの婦人倶楽部は平和の敵だ、家庭の破壊者だ」

「やりますとも、主義も主義ですが、良人に服従する妻として、やらなければならな  
い私と覺悟して居ます、きつと仕遂けますから良人も十分、やつて下さい」

「無論だ、もし一步を誤れば永久に救ふべからざる人生波瀾の一大衝突に會し、妻は  
敵の間諜に入り込み、良人は表面に立現はれ、我々夫婦こゝに内外相應じて働く  
いふ事は、苦しいは苦しいが、人の知らない悲惨を帯びた一種の愉快だぜ、いかに  
活動しても容易に得難い名譽の活動で、眞に武士の行爲だ」

「ところで良人、その原稿は、もう出來ましたの」



「まだ、なか／＼だ、考へて見てくれ、心の底に感謝しつゝある妻を、わざと殊更に罵倒を極めて天下公衆の前に筆誅するんだからなア、すらく／＼興に乗つて筆の運ぶ理由があるかね、文筆を常とする新聞記者の乃公も今夜この一文が前後にない生涯一度の苦心慘澹だらう、全く筆が重いぜ」

「そりやア、さうでせうが、ちよいと、出来ただけでも、見たい事」

「見せられるかい、いよく／＼汝が去つて後、紙上に出てから見るとは宜いが、今、現在かう對ひ合つてるぢやアないか、そんな無理な事、いふない」

「私、わるう御坐いました、では、お先へ寢みませう、ねエ良人」

「あ、寢てくれ、どうか寢てくれ、たのむ」

妻は寢られぬ臥床に入り、良人は再び机に對うて進まぬ筆を執る、夏の夜ますます深くして四鄰に音なく、露けき秋に似たり、

朝夕新聞の紙上、突如として左の一文あり、新聞は有力なる都下第一の新聞、執筆は有數なる記者第一の署名、加之も架空の閑文字にあらず机上の傍觀論にあらずして、本人みづから事實を事實として告白せるもの、

●我妻は去れり

長田健三

我妻は去れり、我妻は去れり、

死せしにあらず、生きて去れり、我より追ひしにあらず、彼みづから進んで去れり、我妻いづこに去れりや、その生家にあらず、その親戚にあらず、今日天下の問題となれる丸の内の婦人倶楽部に歸るが如くに去れり、

我は夫婦の間に子なきを以て、この破壊されたる家庭に幾分の幸福を得たりとするのみ、我は夫婦の間に富なきを以て、この不詳なる變化に幾分の厭ふべき争ひ

を免れたるのみ、我は生活上に於て貧弱なれど、いまだ妻に對して衣食住のため心を苦しめし事なく、我は人格上に於て修養の足らざる點あれど、いまだ妻に對して理由なき盲従を強ひし事なく、その嗜好、その趣味、その感情、その要求、いやしくも我境遇に許し我思想に容れらるゝかぎりは妻としての自由を殆ど遺憾なく彼に與へたり。

我は我父より祖母の手寫し給へる家寶として傳へられし『女大學』の一部さへ、我妻を迎へし時、これを家に止めず圖書館へ寄附せり、我妻は今日の女子として最高の教育を受けしもの、強ち古き道徳と古き習慣を以て監視的に繼續するの必要なく、ま家庭の平和と夫婦の感情これがために阻害せらるゝを恐れてなり、敢て誇るべきにあらざれど、我は斯く信じて斯く思ふ、凡そ良人として妻として妻の存在を最も明白に認めしものは我なりと、

されど我妻は去れり、

我境遇に應じて遺憾なき生命と自由とを與へたるに、我妻は去れり、我祖母の手寫し給へる『女大學』さへ家に止めざるも、我妻は去れり、

我に一も妻を侮辱せし事なく、妻の我に一も恨むところなくして、突然こゝに去れる理由を問へば、答へて、曰く、自覺せるがためなりと、

自覺とは何ぞや、

今日の婦人、口を開けば直ちに自覺を叫ぶ、彼等の舌を運轉する毎に發する聲の自覺とは、そもく何を意味せるぞ、自覺の起點、いつこにある、自覺の目的、那邊にある、いかに惡むべきも我は寧ろ汚れたる姦通のため良人を捨て去る不貞操の妻に却て害の淺くして毒の妙きを思ふ、敢て悲憤熱狂の苦言を弄するにはあらず、汚れたる不貞操の妻は汚れたる不貞操の妻たゞ一人に止まりて、良人これを

失ふに惜しからず世間これに何等の同情なく味方なく、加之も罪を犯すもの、單純にして愚劣なるに反し、彼等の過れる自覺の叫びは、人道の約束に悖りて社會組織の全力に幸福を求めず、殊更其全局を破壊して部分的の斷片に言論を逞しうする結果、滔々たる天下の輕薄女子をして一時の好奇心に喜ばしめ永久の人生涸却に泣かしむ、殘酷の程度あまりに大ならずや、  
兎も角も我妻は自覺の下に去れり、されど我より見れば迷ふべからざる事に迷うて去りしがため、これを自覺にあらず自迷の下に去れるものとす、  
既に去りしもの、我妻にあらず。改めて彼の名を呼ぶ、名は定子、年は二十七、定子始めて嫁せしは今日の女子として殆ど完全な教育と生育の發達せし二十四の時にして、いはゆる舊思想の父兄に強制せられし結婚にあらず、いはゆる俗世間の縁談なるものに放任せし結婚にあらず、たしかに彼みづから良人の性格と良人

の職業に妻たるの希望を抱いて來りしもの、されど妻たりしこと僅に三年、彼が新婚旅行の記念に野外より携へ歸りし董は良人の庭に根を生じて今なほ枯れざるも、彼は脱兎の如くに去れり、  
今や其良人を捨て、丸の内に於ける婦人倶樂部の樓上、何をか語れる、いかに迎へらしか、  
彼は人の妻となりて一個の家庭を安全に保つよりも、時代の要求に促されたる自覺の大なるを認め、斷然こゝに去つて、再び獨立獨歩の婦人となり、天下同性のために活動せんとは、彼が去れる唯一の理由なり、  
されど三年の妻たりし彼に最も婦人の意義と幸福とを宿せしか、長き前途將來その家庭なきところに奔走して自覺を叫ぶ彼に最も婦人の生命ありや否や、  
たゞ現在の彼は今日の女子として、最高の學校より出でしがため、婦人倶樂部の

便利上、男子に對する戦ひの最も必要なる戦闘員として迎へらるべし、また彼の前身は社會の耳目たる新聞記者の妻なりしがため、婦人俱樂部の廣告上、最も世間に對する信用の適例物として迎へらるべし、さらに良人の侮辱より來らず家庭の悲惨より來らずして投ぜし彼は、いかに婦人俱樂部の主義と主張とに偉大なるものあるかを立證すべき裏書人として、歡迎の極、或は一躍その參謀官にも任ぜらるべし、

婦人俱樂部に對する總ての言論は、筆を改めて別に時期あり機會あり、今こゝに關せざるも、婦人俱樂部の廣告的に掲げられ、婦人俱樂部の適例物に用ひられ、婦人俱樂部の裏書人たるは果して良人を捨て妻たる名稱を棄てし婦人の努力に値すべきか、一滴の涙を以て定子の將來を憐れむ、もし婦人俱樂部の廣告にも掲げられず適例にも用ひられず、さらに彼が名譽の裏

書人にもなり得ざるものとすれば、ますます彼が寂しき孤獨の將來を憐れむ、聞くならく婦人俱樂部の普通會員たるものは、近來その會費を倍にして月に五十錢づつなりと、あゝ彼は月に五十錢の銀貨一枚を以て婦人の生涯を安んずべき家庭を賣却せり、彼の父母、彼の兄弟姉妹、彼の親戚、その他あらゆる系統上に何等の忌むべく厭ふべき遺傳性なきも、今に於て始めて思ふ、不幸にして彼たゞ一人その頭腦に一種特發的の變化を來して、正しく精神異狀の狂者たりしなり、たゞ教育の効果と身體の健全とに多少の思慮を支へられし上、さらに妻として得らるゝかぎりの自由を與へられたる良人の寛容は、最も病的に相應せる遺憾なき看護となり保養となりて、三年その狂態の發作を防ぎしのみ、三年の今日、突然として俄に精神の異狀を暴露し其狂態を大膽に現はせしものは、この狂者を誘うて迎ふるに最も有力なる癡狂院あるがためなり、

結局、定子は一の狂者に歸し、かの婦人倶楽部を以て今日の思想界に於ける癡狂院とす、加之も此癡狂院は只これ狂を狂と呼ぶ狂者の集合せるところにあらざりて、その危険なるや、一人の醫師なく一個の藥局なし、

朝夕新聞社の記者たる長田健三は、三年の家庭を破られたるよりも一朝その狂人たる妻の去りし幸福を長く天に感謝し、感謝すると共に婦人倶楽部を明白に思想界の癡狂院として、健全なる人道のため社會のため、その存在を無人島に移さざれば已まざるものなり、

豫め告白す、婦人倶楽部は今後の強敵に、長田健三なるものあるを忘るべからず、

長田健三は朝夕新聞社を退く事あるも、依然として長田健三たると共に、今後の紙上の著名せるもの亦これ長田健三たゞ一個の責任にして、朝夕新聞社に何等の

關係なし、

最後に賀辭を呈すべきは、人道の上より社會の上より存在を許されざる婦人倶楽部にして、いやしくも長田健三を敵とす、また意外の名譽ならずや、

朝夕新聞の紙上、この一文の掲載せらるゝや否、長田健三が知人朋友の憤慨は固より満都の讀者これがために躍り上りぬ、都下一切の新聞社は悉く嚴正なる中立態度と思ひの外、おもはぬところより案外の夫婦おのゝ相判れて、加之も豫告せる今後の紙上に日々の論難攻撃、さらぬも多大の興味を以て迎へし男女兩倶楽部の戦ひ、ますます激しき火花を散らすべしと、

朝夕新聞社の樓上、應接所の扉を固く閉して、相對へるは男子倶楽部を代表せる例の田口雄太郎と長田健三、

「や、今朝の紙上を拜見して、全く同情に堪へません、實は長田さん、この田口も我妻は去れりの目に逢ったのが、今日かうなツた動機です、無論、貴君の我妻は去れりよりも、その去り工合が頗る淺劣ですがね」

「なアに去り工合の如何に拘はらず、妻として良人の許を去り家庭を破ツて出る女は、その妻たりし間その良人を欺いた女です、否、良人を欺いたのみならず、自己の父母を欺き良人の父母を欺き雙方の親戚朋友を欺き世間一般を欺いた女です、動もすれば今日の彼等、婦人も男子と等しく一個の人間として存在すべきもんで結婚は生涯の同棲を守るべき契約でないから、その存在上に存在の意義を毀損せらるゝ場合、夫婦以外の生命に向うて出るのは天賦自由の權能だと、まづ大體かういふのが彼等の結婚に對する自覺ださうです、はゝゝゝちよいと生意氣に一理あるやうですが、實は困ツたもんですなア、所謂る彼等の毀損されるとか侮辱されるとか立騒ぐ

存在なるものは、どのくらゐの分量と程度に考へてるんでせう、夫婦以外の生命に向うて出るとは、狼狽へて何處へ出歩く意味でせう、つまり婦人は男子のために生きて居ないとか生殖事業を意味するのみで無いとか言ツて、近ごろ流行の獨身生活を營まうとするんでせうが『智慧のある馬鹿に阿爺は困り果て』といふ昔の古い川柳が最も痛快に新しい今日の彼等を罵倒して居ますよ、はゝゝゝ」

「なるほど、智慧のある馬鹿に阿爺は困り果て、こりやア面白い、こいつア妙だ、破壊を進行と心得て何事も一切の過去を敵視し、あけても暮れても新しい〜と頻りに新しがツてる彼等を、この古い卑近な川柳たゞ一句の罵倒は、いかにも痛快だ、はゝゝゝさぞ口惜しがツて怒るでせう、はゝゝゝ」

「しかし事實ですよ、たとひ彼等のいふ事に多少の合理的があるとしても、彼等は總て大きく物の全體を見るの眼がなくツて、たゞ小さく自己の近視眼に觸れた一角だ

けに鋭敏なんですから無効ですよ、卵子は半熟の方が滋養になつても、彼等が半熟の端た學問で跳ね廻るに至つては、實に手も着けられない世の中の厄介物で、ありやア狂氣のダンスですよ、今朝の紙上に一撃を下した通り丸の内の婦人倶楽部は取も直さず、眞理の憧憬さか、永久の生命とか、存在の自覺とかいふ壁畫の中で躍り狂ふ一個の無踏場ですよ」

「あれを、また世間では、女の臍線金や巾着錢を集めて出来た偉大の建築物と驚く奴があるさうですが、何を馬鹿な、その臍線金も巾着錢も、やはり男子の生産力を消費したもので、眞實に女の錢といふものは我國の今日、たとひ五錢でも十錢でも、あはれな襤褸半纏に赤ん坊を脊負つて炎天寒風に辛いともいはず、一所懸命に荷車の後押をしたり普請場の礎築をしたり、口穢く罵られる良人と共に砂塵の膏汗を浴びて働く労働者の妻にあるんです、同じ女の中に今日、この神聖にして尊敬すべき

斯かる婦人のあるにも拘はらず、これを古き習慣力に強ひらるゝ無智無學の女とし或は横暴なる男子の壓迫で生命を奪はれてるやうに見る彼等ア、全く罰が中りませぬ、彼等は男子に反抗する敵ばかりでなく、最も神聖に働いてる婦人に對しても一言の申譯なく、或る意味に於ての悪むべき敵ですよ」

「いや、全くですよ、實は文句なしに叩き潰しても宜いくらるで、わざくゝ男女思想界の衝突だなんかと、いふほどの價值はありませんからなア」

「しかし彼等も、既に堂々たる陣營を張つて、戦端を開いて来た以上」

「無論、捨て、は置けませんよ。うそにも時代の要求とか現代の思潮といふ旗幟を、おツ立てゝ来たんですからね、ところで田口さん、貴君の方は十分、遺憾なく出来て居ますか」

「まア十分、出来て居る考へですが、此際、貴君といふ思ひも寄らぬ飛將軍の不意に

現はれたのは、實に我々の大なる力です、どうか我々と主義の一致を缺かないかぎりには間斷なく御援助を願ひます」

「あらためて男子倶楽部の戦闘員に加はる事は、聊か差支へますが、及ばずながら自由自在の遊軍となつて、ウンと一番、やりませう、却て遊軍の方が總ての活動に便利ですよ、この長田健三は新聞記者として公平無私だが、その公平無視は男女兩倶楽部に對してでなく人道上の公平無視なるが故に、寧ろ社會のため家庭の破壊者なる婦人倶楽部を攻撃するといふのが僕の標榜です」

「いかにも御立派な態度です、どうか是非、願ひます、實は真正面の敵とする婦人倶楽部に向つては、十中の八九まで必勝の成算ありますが、近頃は随分、男の中で、我々や貴君と正反對に、いはゆる婦人敬愛の中毒者が無いにも限りませんからねエ、これが面倒です」

「どうせ、さういふ奴が飛び出しますよ、しかし田口さん、御安心なさい、さういふ方面は遊軍で受持ちませう、また真正面の敵に向つて必勝の御成算があるとしても、此際もし一步を過れば我々男子の面目に關するのみならず、今や疑ひと迷ひの雲に閉ぢられつゝある天下の婦女子を擧げて永久に過るこつてすから、甚だ失敬ですが、やはり油斷大敵といふ常套語を、お氣に觸へず受けて戴きたい」

「有難う、謹んで受けませう、なほ今後いろくくと總ての御注意を願ひます」

「いや、別に御注意を申し上げるには及びますが、あの婦人倶楽部を脊負つて立つた藤原秀子といふ婆アさん、ありやア案外なか／＼策のある凄いもんださうですな」

「兎も角、女で、これだけの騒動を持ち上げる婆アさんですからね、つまり世俗でいへば、煮ても焼いても食へず、とても二筋繩では行かない方でせう」



「でせうなア、しかし、あの婆アさん、いくら神算鬼謀を旋しても、いくら秘密の蓋を固く閉ぢても、探る方法を以て探れば、探れない事もありますまい、戦ひに敵の策略を知るは總ての奮闘と總ての武器に勝る第一の要ですから、この長田、何とか考へて見ませう、なアに工夫がありますよ」

「もし、それが、その工夫が貴君の手にありとすれば、たゞ痛快を叫ぶのみでなく、實に社會の幸福です、いづれ勝敗は決するにしても、一日早く決すれば、一日早く世の中に平和を興へ得る理由で、もとより彼等を敵に取つて戦ふのが目的ぢやありませんからなア」

「無論ですよ、お互に我妻去れりの一時は動機になつても原因では無いんですから、よろしい、田口さん、ちよいと暫時、この長田に委して置いて御覽なさい、きつと近い内に何等か一件お手本に、腕だめしに探り出して見ませう、はゝゝゝ探れま

すよ、探れますよ」

「是非、願ひませう、いづれ明日また伺ひますから、その節あらためて、なほ委しく」

「ぢやア、これで、失敬します」

「御同様、結局、かうなつて見ると理窟ツばい鼻アの居らない方が却て、氣樂ですな、はゝゝゝ」

「氣樂ですとも、さんざ競争場裡の奮闘に疲れて来て、やれ／＼と手足を伸ばす休養の我安心場所に屁理窟の塊物が待つて居ちやア、堪りませんよ、はゝゝゝ」

「いはゞ今までの内憂外患を寧ろ内憂だけ助かつた理由です」

「その代り外患に餘計な面倒が殖えたから、やはり同じこつてすよ、はゝゝゝ」

「平ツたくいへば、まづ當分男女の根くらべで、つまり人間の獨身くらべでせうよ、

はゝゝゝ」

「さア、どツちが先へ寂寞を感じますかね」

男子倶楽部の總將たる田口雄太郎、新に遊軍の飛將たる長田健三、冗談半分に笑ひながら固く固く手を握り合うて、

人知れぬ苦痛に人知れぬ快樂を有し、今日の時勢に精華されたる武士道を以て自ら任ぜる長田健三、

最愛の妻を敵の間隙に入れて、婦人倶楽部に手盛を一ぱい喰はせしのみか、我妻は去れりの一文に天下の耳目を奪ひしとは知らず、心易き京阪うまれの商人、狼狽へて飛び込み來りぬ、

「長田はン、今日は」

「やア、まだ歸らないのか」

「いえ一昨日、歸る覺悟でしたが、つい取引上の都合でな、時に長田はン、えらいこつたんな」

「何が」

「何がて、あなた、昨日の新聞で、奥さんの一件」

「はゝゝゝ」

「はゝゝぢや、おまへんがな」

「おまへんでも、しようがないよ、あゝいふ理由で、出たんだからね」

「あゝいふ理由か、どんな理由か、その邊は知りまへんが、兎も角、出るなら出で、出すなら出で、おとなしう互に話し合うて、相談つくにしなはれな相談づくに、いや我妻は去れりの、いや狂氣ぢやのと、みツともない、わざくゝあんな事を

新聞へ書くといふ事がおますかいな、全體、あんたは大阪の新聞社に居なはる時分から、あんまり氣が短うて、萬事にあツさりと、すつぱり仕過ぎなはつたぜ、え、すつぱりするのは男らしうて、えゝかも知れんが、あほらしい、こんな事に、あゝすつぱり仕過ぎては無茶やがな、あの奥さんも奥さんや、あんたのやうな捌けた物の分つた人を、まアどこに不足があつて」

「なアに別段、この乃公に大した不足があつて、怒つて出たんでも無いんだよ」

「こりや呵しい、夫婦の間で互に不足も無いものが、怒りもせずに笑ひながら出たり出したりしますかいな、ぢやらく」と

「そこにね、なか／＼深い理由があるんだよ」

「深いか浅いか知らんが、そんな分らん事が、よろしい、あんたには大阪以來、お心易うして貰うた私ですが、是非とも今日の夜汽車で歸るのを二三日、延ばして奥さ

ンに一應、奥さん何所だす」

「いや、相變らず深切に有難いが、捨て、置いてくれ、いはゆる世間の夫婦喧嘩で分れたのは却て、仲裁も出来また考へ直しも出来るがね、つまり雙方の根柢に主義の合はないところがあつて、時代の思潮といふものに餘儀なくされたんだから、無効だよ、乃公の家に限らず此ごろは婦人倶楽部と男子倶楽部との戦ひで、社會あらゆる階級に家庭の不安を來した結果、かういふ夫婦分れが随分あるんだ、決して珍らしくないんだよ」

「さア、それぢやア婦人倶楽部、そいつが業をしをツて困る、どうも、そいつ、氣に入らんやツちや」

「はゝア、京阪地方にも、響いてるかね」

「大概な事は算盤珠の音で弾き倒す商賣地だツさかい、第一また東京ほど男攻めの學

問した女子が妙いし、さう、どえらい響きも、おまへんが、やツぱり、うるさいな、どうやらすると近ごろ鼻や娘どもが、急に馬力を加へよツて困る」

「はゝゝゝ馬力を加へるは面白い」

「さうだんがな、ぎゆう〜と朝夕に絶えず頭を押へてこましても、隙を覗いて無茶苦茶に廂髪を突き出したりバタ臭い息を吹き廻ツたりする世の中だツしやらう、その上に長田はン、今いふ婦人倶楽部のやうな悪智慧の發電所が出来て頻りに熱を送るんだすもの、なるほど電気仕掛けの人形が踊り出すと同じ理窟で、熱に浮かされた我身知らずの女子どもが、きやツきやと立騒ぐ筈ぢや」

「いや、實際、その點はあるよ」

「しかし熱が醒めて、女子どもの騒ぎ草臥れるまで、ベン〜と待ツて居れまへんな、どうしても今のうち何とか工合よく取押へてやらんと、こりや雙方お互の損だ

ツせ」

「全くだ、そこで一方に男子倶楽部といふものが起ツたのさ、陰ながら我々も大いに味方してね」

「さう、ありさうなこツちや、さうなうて叶はンな、この私も商賣なしの暇な人間なら一番、こゝは見物もして居れまへん、その男子倶楽部へ飛び込んで、夢中に騒いだる彼女等の鼻の穴へ、心持よう、かましてやりたいなア」

「かましてやりたいとは、何を」

「屁を」

「屁」

「屁だす、女子が常に優しくしてくれゝばこそ、男は汗水に働いて大事に掛けてやるもの、そんな料簡も方角も間違うた奴に、この忙しい手や足を出して居れますか

いな、どう氣張ッて見ても屁の外に出まへんな、臭い屁で結構」

「ばゞ馬鹿な、はゞゞゞしかし愉快だ、ねち／＼と持つて廻るやうで案外、なか／＼京阪言葉には急所を突いた毒々しいところがあるよ、もし其調子で無遠慮に婦人倶楽部攻撃（演説を遣らして見たいね、彼等が常に口癖の侮辱々々も、一發の放屁で追ッ拂はれちやア流石の敵も呆れて驚いて、逃げ出すだらう、はゞゞゞ」

「いや、長田はン、もし演説が今の商賣より錢になれば随分やらンにも限りまへんぜ、なんぼ學問があらうと理窟を吐さうと、高が女子やおまへんか、ぐゞぐゞ文句いはすに足らんがな、頭上から高飛車に出れば」

「ところがね、さう手軽に押へられる彼等では無いよ、また彼等にも彼等相應の主義と議論を立て、來るンだからね、進歩せる今日の社會、昔の亭主關白の位ぢやア無効だ、やはり戦ふだけは戦ッて、立派に降伏させねばならない、實は彼も人道を叫

び、我も人道を叫ぶ、その人道上いづれに眞理あるかといふのが結局で、勝敗の決だ、折角、深切に來てくれたし久しい馴染で、談話が面白いから興に入ッて聞くが、さういふ容易な單純な理由で勝負の付く争ひぢやアないよ」

「それが、いカン、そこが長田はン、いままへん、世の中の諺に水掛論といふ事、おはッしやらう、あれが取も直さず、それで、兩方から同じ水を掛け合ッてるさかい、いつまで經ッても同じ事で、勝負が付カン、どツちか一方、度胸を据ゑて、思ひ切ッて、かまふ事はない、ざぶりと頭から沸湯を浴びせてやるンぢや、はゞゞゞあんた方、あんまり本を讀んだり理窟を考へたり、入らざる世間へ氣兼ね仕過ぎで、人道か神道か知らンが、さア今といふ眼の前の急場に埒の明カン事ばかり繰返すによッて、よけいな面倒が長びいて道行に日が暮れるンだッせ、委細かまはず頭上から沸湯を浴びせてやりなはれ沸湯を、ぐうも、すうもあるモンかいな」

「や、ますく、氣焰萬丈だね、しかし兎も角も、きびくとしてるよ、その勢ひで遣らう」

「勢ひばかりでは長田はン、なんにもなりまへんぜ、全體あの女子といふ奴、氣が小さいくせに執念が深うて、相手にすればするほど意地わるく附き纏うて來くさる、何を吐しても喚いても黙ッて居て、二度と再び脛腰の立たんやうな目に逢はしてやらんと、あきまへん、もし油斷して、うツかり白い齒でも見せたが最後、すぐに甘へるか喰ひ付くか、ろくな事を仕をらん」

「まさか、さうでもあるまいが、随分と困ッたもんだね、女の變に片寄ッて拗ねたのは」

「女、變な、こいつ面白い、なるほど、をんなでなうて、へんなは妙ぢや」

「は、は、いよく出でて、いよく奇だ」

「いよくといへば、いよく今夜このまゝ大阪へ歸りませ、よろしいか、ならう事なら奥さんに一應御意見をして歸りたいがなア」

「それは止してくれ、芳志だけ受ける」

「さよか、しかし長田はン、あの奥さんに限ッて、どうも不思議でならん、商用で年に四五度づつ東京へ來るたンび、お目にかゝると、いろく良人が大阪で世話になつたさうですとか何とか、いうてな、ほんまに氣心の優しい萬事に行届いた奥さんだしたがなア、實は學問した割合に、物事の分つた女子はんだしたぜ」

「は、は、また奇言を吐いたよ、學問した割合に物事が分ッて居たかね、は、は、」  
 「さうだんがな、あれで學問さへなくば今度、こんな事出やする筈は、おますまい、どこまでも連添うた一人の旦那はン大事に外へ見向きもせず、一家といふものを自分の天地と心得て、神妙な奥さんで通つたものを、惜しい事には、やつぱり學問が

邪魔して、かうなつた曉、どうです、それとも長田はン、出た奥さんが道理で、  
あんなの方が悪いと諦めて居なはるか」

「まア、さう察めてくれるな、また其うち何とか、乃公の面も立つ時節があるよ」

「は、は、あほらしい、あなたが私に察められる人だツかいな、もし此ま、奥さんが  
どうしても歸らんと極れば、實のところ、お世話したいな、二度目の奥さんを、大  
阪から、別嬪で温順で利發で素性が正しうて理窟もいはず、貰へば直に目出たう子  
の出来るやうな」

「は、は、或は頼むかも知れないが當分、まづね」

「さア今というて、探せまへンが、そろ／＼心掛けて置いても、よろしいか」

「や、待ッてくれ、さう急ぐに及ばない」

「善は急げぢや」

「いくら善でも、こればかりは」

「兎も角も長田はン、よう詮議して今度こそ、うかく深い學問のある女子を持ち込  
まれないやう、それが第一の用心だツせ、動ともすると此ごろの女子は其身の落付  
け場所を間違うて、おのれの學問へ嫁入するのか、生涯大切の良人へ嫁入するのか、  
さッぱり分らん」

「うまい、學問へ嫁入、いかにも警句だ、もう十分、今までの談話中その一句で盡し  
得たりだ、打止め、打止め」

#### 其 四

あり餘る家作地面に年齢は七十の上を越して、この財産を譲るべき兄弟三人の内、お  
となしい二人の兄を失ひ残る末子の一人が今年二十六の遊治郎、

いはゆる内を外の晝夜を分たぬ放蕩三昧に、烈火の如き老爺の禿頭ますく湯氣を立て、舊式の眼鏡越に今日こそは、おのれ、さア其處へ坐れの大喝一聲、されど其處へ坐らされし子息は針の筵とも思はず、案外の平氣、いづれ遺産は我物といふ疊の上、暑中この熱いに御苦勞千萬また藥罐が沸いたと金縁の眼鏡越、つまりは父子ともに新舊二重の眼鏡越なり、

「さア今日といふ今日こそ、段々と考へた果に、いよく乃公も諦めて仕舞った、別に養子でもして、この財産を他人に譲るか、生んだ我子の汝に譲るかの境目だ、平生の小言と違ッてるぞ、わかッたか、しッかり返答しろ、二度と再び取返しのないこッたぞ」

「いや、仰しやる事だけは十分、しッかりと聞きますが、わざく何も、そこまで難しくあらためて、いはれるほどの覚えはありませんよ」

「覚えがない」

「ありません」

「や、ありませんと汝はツきり吐したな、さう立派にはツきり返答の出来る奴かい」  
 「お父さん、そこです、それが、いつも困るんですよ、いくら父子の間でも人は感情の動物ですから、頭ごなしに怒ッて掛ッちやア雙方お互に眞意を缺くの恐れがあります、いふ事があればあるで、どうか怒らずに理由を、言ッて下さい」

「あたりまへの理由を言ッて理由の分る奴なら、なさけない、自分の生んだ子のあるに、わざと、他人を養子にする考へが起るか、いくら言ッても分らない奴だから今日はいよく改めて汝の料簡を聞くん、全體まア汝は、何と心得てる」

「何をです」

「何をですとは何だ、學校へ遣れば今一息で、どうか、斯うかならうといふ卒業前に



飛び出して、いや戀だとか愛だとか染物屋の色壺を並べたやうな、ろくでもない雑誌を拵へたり、拵へるかと思へば直に止めて、また今度は小説を書くの、いや演劇の作者になるのと、それも宜いが今日まで一事として、満足に出来た事があるかい」「しかし、そりやア、お父さん、無理です、いちく現實に伴ふ物質上の事は知りません、今日世の中、總ての高尙なる上には必ず、いづれにしても研究を要すべき試みといふ時代がありますからね」

「試み、馬鹿、人間は一人に生涯たゞ一度だぞ、手も足も二本づつあるが一人前の生命に月日の二度と来ない年が年中、うかく試みばかりして居れるかい」

「いや、それぢやア試みの解釋が違つて居ますよ」

「どこが違つてる、大體に間違つてるのは汝だぞ、雑誌や何かの事は暫らく置いて、この一三年來、どうだ、汝の身持を考へて見ろ、立派な家作地面を人に貸してさ、じ

つとして居ても安樂に暮せる身代に生れながら、一杯の茶も無代で吞めず一時間に幾何といふ高い席料の待合や、金を囓むやうな料理屋で三味線も枕も同一物に心得た此頃の藝妓を相手に、ふざけ散らすとは、ものゝ冥加を知らないにも程ののあつた奴だ、それも自分の腕から出る働きでする事か、親の光りを偷んだ高利の金で白粉臭い女を乗せて、用もないにブウくと自動車を走らしたり、や、もう呆れ返つて物もいはれないほどに馬鹿さ加減の念入な奴だ、手も着けられない」

「なるほど、其點については多少、申譯のないやうな事もあるやうですが」

「現在、おのれの事を他のやうに、あるやうだとは何だ、第一また汝、其點ばかりだと思つてるか、どの點から見ても申譯のない奴だぞ」

「しかし、お父さん、其外に別段」

「ないもんか、結局、いつまでも若い者を獨身で置くから、よくないと人にもいはれ

乃公も考へて、これまでの間にいくら嫁を進めたと思つてる」

「お父さん、それだけは少々、いはして下さい、それには大に理由があります、強ち藝妓遊興をするから嫁を買はないと、さういふ單純な意味ぢやアありません、人生の問題上、最も忽にすべからざる重大の理由があるんです」

「生意氣な事をいふな、おのれの脚下も見えないくせに、重大の理由も問題もあつて堪るもんか、蓋のない口ばかり無闇と達者になりやアがつて」

「いや、お父さん、生意氣でも何でも、こればかりは人間の生涯に關する大切なことです」

「生涯の大切より手近の小さい事に氣を付ける」

「さう、いちく、ぶち毀されては困りますよ」

「誰が汝を、ぶち毀す、曲りなりにも盛り立て、やりたいと思へばこそ、父は心配し

て苦勞するんだぞ、その父の苦勞も心配も有難いとは思はず、片ツ端から、ぶち毀して掛るのは汝ぢやアないか」

「まアさういはずに、お父さん、聞いて下さい、慌て、嫁を取らない、その急がないに就いては、急がないだけの立派な理由があるんですから」

「よし、今日これが最後だそれ、ほど饒舌りたい事がありやア兎も角も饒舌ツて見る、なるべく聞きたくはないが、どうせ汝は迷惑の掛けついでだ、乃公は辛抱のしついでだ」

「いくら今日の我々が考へても、さういふ深酷な骨を刺すやうな言葉は出ませぬね、やはり昔の古い人の方が罵倒に妙を得て居ますよ」

「こら、昔の古い人とは何だ、昔なら昔で分ツてるに御丁寧な、その上へ古い人とは汝、どういふ料簡だ、ちよいと吐す事にも父を馬鹿にして、昔の古い人といふ事が

あるか」

「だって、お父さん、ことし七十五でせう、ことし七十五とすれば天保の末で、安政萬延、文久、元治、慶應、明治、こりやア驚いた、數へて見ると八九代の年號を一人で脊負ッて來たんですな、なるほど無理はありません、よほど現代と空氣が違ッてますから自然、總ての上に衝突がある理由です」

「すきな事を吐せ、どこの世界に子より親の若いものがあるか、不孝も世間普通、ただの不孝と違ッて不孝に講釋の付く奴だから呆れる、もう涙も出ないくらゐだ、さア饒舌りたい事を饒舌らんか」

「さう疊みかけて、さア饒舌れといはれちやア困りますが、お父さん、此頃は容易に妻を迎へられません、うかく嫁を娶れません時ですよ」

「なぜ、何故だ」

「何故でも社會の現在が實際、さうなんです、いはゆる過去の習慣力に支配せられた昔と違ひ今日の女子は皆、それく新しい理想といふものを抱いて、女子それ自分の生活、もしくは自分の身體でなく、その新しい理想が男子に嫁するんですから、なかく面倒ですよ、現に丸の内の婦人俱樂部、あれが理想の實行を目的とする旗幟の下に天下の男子を相手として戦ひを開きつゝある世の中です、これがため既に久しく夫婦となつて居るものさへ理想の適否に依つて別れるくらゐの今日です、まして未婚の女子は只、金があるの暮しが安樂だの、男振が好いのと、そんな薄弱な卑近な物質的の條件ばかり揃ッたつて、今までのやうに、おいそれと喜んでは來ませんよ、たとひ來たにしても、自分の意に満たない事があれば何時でも遠慮なく、さつさと尻に帆かけて後も見返らず出で行きますぜ、また出て行つても吐る事の出來ない理由を持つて居るんですからなア、つまり結婚は男女兩性の意義を完うする

ために行はるゝ一の方便で、もし結婚が自由とすれば離婚も自由であるといふんです、しかし男子の方も黙って居ませんよ、さう我まゝな女子の註文ばかり受けて居ませんから、そこで両方の大衝突、いはゆる男女の戦ひが始まつたんです、お父さん、今が男と女の戦争時期で、とても氣に入つた嫁の取れる場合ぢやありませんよ、わけて言ひ憎いこつてすが、お父さんのやうな舅の氣に入る嫁は逆も、とても無効です、いくら探しても到底ありません」

「この野郎、自分の放蕩に便利だから、これ幸ひに輪をかけて、針を棒のやうに饒舌くるんだらう、いくら世界が突飛に間違つたつて、そんな馬鹿な事があるもんか、あらうとしてもあられる筈がない、それぢやア世の中が闇で、夫婦の間に出來た子を誰が育てるんだ、現在この町内に汝、まだそんな事で夫婦別離したものア一人もないぞ、加之も此三月ばかりの間に乃公の知つてるだけでも無事に目出たく婚禮の

祝ひ物を三軒、やつてるぞ、さアどうだ、今の若い奴等、千人に二人か三人、たまさか萬人の中に五六人も妙な變つた事があれば、すぐに驚いて日本國中、さうなつたやうな大騒ぎを始めるよ、つまり騒ぎが噂を産んで空騒ぎに騒ぎ廻る奴等だ、お祭禮に樽天王を擔いで廻る小兒の方が、よほど氣が利いてるぞ、たとひ汝のいふ通りにしたところが、世間は汝の思つてるよりも案外、ずつと廣いもんだ、汝さへ放樂を廢めて父の意見に従へば、わざ／＼探さなくつても好きな嫁の争つて來る身代だ、そんな薄ッぺらな不自由な世の中に人間が生きて居られるかい」

「お父さんは一切、萬事に過去の人だから困ります、昔は辻の犬の糞に人集りしたさうですが、今日の我々は決して根柢のない噂から産み出した事に空騒ぎをしてるんぢやアありません、争ふべからざる時代の思潮が、さうなつてゐるんです、早い談話が、こゝに一人のペストかコレラ病があるとして、お父さん、その病氣は一人なる

が故に周囲の多數が安心して居れますか、よもや安心して居れますまい、やはり同じ理で、今日に於ける婦人倶楽部の會員は今日に於ける會員だけですが、やがて今に社會の女子全體を擧げて、たとひ悉くでなくとも、多少の教育あるものは、きつと、さうなりますよ、さうなるとして、もし無教育の女子を迎へないとすれば、一時これを無事に娶つても、その嫁は後で、どうなるか分らない嫁ですぜ、お父さん、今こゝで急がないのが宜いか、また急いで後で文句の多い、ごたくするのが宜いか、頗る考へもんですよ、今年まだ二十六ですもの、こんな時に、さう慌てゝ、急ぐ必要も無いぢやアありませんかねエ、お父さん」

「なアに、それが汝が勝手な小理窟だ、しかし口の減らない奴に、いつまで言つて聞かしても仕方がない、兎も角も嫁の一件は後廻しとして、全體まア汝はどういふもんで、さう放蕩が止まない、藝妓遊びが何になる、たゞ面白いだけでは承知しない

ぞ、いち／＼何事にも生意氣な講釋する奴だ、さア藝妓遊びの立派な講釋を父の前でして見ろ」

「別に立派な講釋も何も、ありませんが、やはり亦これ社會の一部に、或る意味の存在を認めらるゝ婦人で、そも／＼藝妓なるものは」

「おや、この野郎、始めたな」

「だつて、しろと今」

「たとひ、しろと言つても汝、子として父の前で、しられると思つてるか、平氣で、しやア／＼と」

「そりやア無理ですよ、しろと言つて、すれば何故すると、いくら父でも、そんな」  
「よし／＼、汝のやうな馬鹿ア父の心と言葉との間に、どういふ呼吸があるか、人間らしく呑み込めないんだ、ぢやア始めろ、藝者の講釋をしろ」

「します、からなれば、して宜いのか止して宜いのか、どツちか分りませんから、いッそ思ひ切ッて寧ろ忌憚なく述べますが、やはり實際の原因は、これも婦人倶楽部からです、かの婦人倶楽部が天下の男子を敵に取ッて、そもく女子は男を慰め男を喜ばしむるために生れたのでない、無論また男の使用物でもなく男の服従物でもなく、つまり男と等しく同じ資格を備へて生れた以上、男に一步も譲るべきものでないと、かう叫び出してからは、多少その理由の幾分を認めないでもありませんが、苟も我々の女に對する感情が一時に冷却して、俄に愛の寂しさを覺ゆると共に、もはや人生に何等の暖かみもなくなッて仕舞ひました、ところが今日こゝに藝妓なるものは、依然として我々を慰め我々を喜ばしめ、ますく我々のために美を競ひ妍を争ひ、いよく我々のために厚遇歡待いたらざるなく、殆ど自己を空しうして我々のため、憂苦を拂ひ快樂を供して、遺憾なく我々に満足を與へてくれますから、

勢ひ我々はこれに傾かざるを得んぢやアありませんか、たゞ單に性慾のためでなくさうでせう、もし理想とか自覺とか喧しい面倒のない嫁を取らうと思へば、今日のところ、寧ろ藝妓の中から選り出すより外にありませんア、お父さん、藝妓の中にも随分、今日の妻として恥づかしからののが居りますぜ」  
これが乃公の産んだ子かと眼鏡越に呆れて打守りし老爺、昔氣質に鍛えたる岩疊の腕節、ぶる／＼震ふかと思へば、無言の不意に其横面、ぐわんと喰はしぬ、

「ア痛ッ」

「痛い、ふしぎだね、痛い事だけは分るんだな」

其五

婦人倶楽部の男子倶楽部に對する砲火第一發は、いふまでもなく婦人倶楽部の總大將

たる藤原秀子の名を以て、都下あらゆる新聞の廣告に左の如く掲げられぬ、

藤原秀子著 菊判美本二百餘頁

# 生ける女の聲 第一卷

## 露骨の告白 天下の至廉

### ◎實費提供

印刷、製本、廣告、郵税其他一切の實費を初版二萬部に割り當て一部の代價

金十一錢

墓場に葬られたる女のみ死せるに非ず今日の婦人は多く男子のため精神的に殺され若くは自殺せるものにして僅に其死を免るもの亦一時の魔酔劑をかける、茲に殺されず自殺せず魔酔劑にもかけられずして我生命に生ける女の聲を聞かずや、

發行行

婦人俱樂部

たとひ婦人俱樂部の主義に反對せる新聞社たりとも、著作物として一定の代價を支拂ひし廣告を謝絶すべき理由なく、またこれを謝絶するの寧ろ卑怯なるを恐れて、滿都の新聞紙上へ一朝この廣告の現はるゝや否、著者は敵にも味方にも待ち受けて其一擧手一投足を目指さるゝ藤原秀子、加之も實際の實費、廣告料と郵税まで加へて二百ページを僅に十一錢とは、これを天下の呼び物に定價七十錢とするも八十錢とするも出版界のレコードを破りて飛ぶが如く賣れ行くべき此著書に一文の利益を取らざるところ、いかにも銳利なる武器なり、忽ち初版再版三版四版、その幾版を重ね行くべきや、都下の書肆、おもはず算盤を弾いて眼を丸くしながら、あゝ勿體ない、されど好意的の取次以外、一切の割引を禁じて書肆の手にかけず、婦人俱樂部みづから賣り出せし盛況、新に門前へ板圍ひの發賣所を設けて、餘儀なく巡査を出張せしめ

雑踏を制せしめしは、どこまでも藤原秀子の作戦振りを現はせり、

「どうだい君、買ツたか、生ける女の聲を聞いたかね」

「買ツた、癩に觸るが買ツたよ、しかし大變な勢ひだね、第一また十一錢は廉いぜ」

「全くだ、兎も角も豪い婆だね、加之も實際の實費で本屋にも取次の利益を與へず自己の陣營から堂々と大膽に賣り出したところは、いかにも、やツたね、つまり我々は買ツたんでなく買はされたんだね、無理に讀まされたやうなもんだ」

「高が捨て、も十一錢だもの、誰だツて見るよ、どんな事を叫んでるか喚いてるか、残念ながら是非とも買はざるを得ないのみか、面白半分の好奇心に驅られて、わいわいといふ騒ぎだ」

「おまけに頼みもしない巡查を四五人も餘儀なく立たしたところは、ますます癩に觸るな、既に男子を一本、まるツたやうな氣がするぜ」

「だがね、ステーションの切符を賣るやうな場合に、わざと目立ツた急拵への板圍ひで、發賣所の窓から十人あまり面を並べて、錢を取ツたり本を出したり一生懸命になツて居た奴等、あれでも女だらうか、え、一人として満足な面アなかつたぜ、中に一人、三十四五で取締か監督のやうに目を配ツて居た女、ありやア何といふ面だらう、此方を向いてゐるのか彼方を向いてゐるのか前か後か裏表の分らない面だツたぜ、これまで僕も随分、いろんな面を見たが、あゝいふ面ア始めてだ」

「どうせ君、男に可愛がられない連中が寄り集まつてるんだよ、加之も陣笠の下廻りで、いはゆる雑兵端武者と來てるからね、ろくなもんは無いさ、はゝゝゝ」

「全體まア君、あれなんかの最後はどうなるんだらう、主義は兎も角、勝敗は俥置い



て、まさか性慾が消滅したンでもなからうに、考へて見ると、寧ろ一種の哀れを催すね」

「なアに君、さう哀れを催すに及ばないよ、あゝいふのは自然と肉體の作用上にも變化を來して、性慾の點は、もう無いかも知れないぜ」

「それで安心した、もしあゝいふのに性慾があられちやア、運わるく取ツ捕まつた相手の男は生命を縮めるからね、はゝゝゝ」

「しかし僕の友人が、さう言ツたぜ、賣切れを恐れて一時に發賣所へ雲霞の如く押寄せた人間を、あの魏々たる鐵骨石皮の三層樓で窓の外の運動場から、さも痛快に、冷笑的の態度を以て見下して居た婆、あれが藤原秀子に相違ない、手を背後へ結んで聊か胸を突き出して、ぶらゝと歩きながら、をりゝ下を見る工合は、恐るべき惡魔の化身が空中より下界を呪ふが如くに、何となく凄かつたさうだぜ」

生ける女の聲、その内容は世間一般の豫期せるよりも案外に最も平易なる言文一致を以て最も簡略に解し易く、加之も及ぶ限り鋒銚を包みて殊更に謙遜の態度を持ち、なるべく婦人的を失はざるに力めたれど、をりゝ例の藤原秀子式を發揮して、天下の男子を野邊の枯草とも見ざる大膽不敵の點あり、試みに其一二頁を開けば、

世の中には實行に伴はないといふ不深切な一語を以て、最も有力なる人生の結論として居るやうですが、實行に伴はないものが悉く無理な注文でもなく机上の空論でもなく、その伴はないものよりも現在の實行と稱するものか、そもゝまづ研究の先決問題であるかと思ひます、

あれは出來ない、これは許せない、さうは容れられない、應じられないといふの

は、多く現在の便宜上と眼前の都合上から割出した一種の嫉妬的防衛策で、また自己の立場を奪はるゝ恐れを抱いた保守的の卑怯な態度で、進歩とか發展とか覺醒とかいふ人類の向上は、どうせ現在を破る意味が含まれて居りますから、いづれも始めは現在の實行に待ち受けた如く都合よう便利に迎へらるゝものではありません、寧ろ一時は現在の實行と勢ひ已むを得ず衝突し競争して、衝突と競争の結果、天地自然の大法に淘汰されて永久の生命を保つべきものであります、我々が今日こゝに叫ぶ婦人問題も、またこれと同じ理で、古い習慣に根を持つた舊思想の社會や家庭や世間普通の人情からは、やはり實行に伴はないといふ一語の下で意地わるく防がれて居ります、なるほど我々の自覺と要求とは、いかにも今日の社會に歡迎せられる筈はありません、何となれば今日の社會なるものは、二千年來この我々婦人を殆ど厄介な食

客的待遇をして、あらゆる人類の權利と幸福とを悉く男子の手に横奪し専有し占領して來たのですから、實は良心に省みて我々の理由ある要求と道理ある權利を認めて居るかも知れませんが、今更催促せられて急に其幾分を割くのは殘念でもあり、また既に取つたものを取返さるゝのが惜しくもあるといふやうな、卑しい狭い吝な料簡かと思はれます、さもなければ、これほど立派に公明正大な理由の分らない筈はありません、法律上では或る期間の専有と占領とを以て全然その所有に歸しますが、この社會は法律や年數に依つて男子の所有物に歸すべきものではありません、人類といふ大なる上より男女兩性の共有物で、即ち男も人として存在し女も人として存在すべき對等の筈です、もし女は男より體格の上に劣つて居るといへば、すべての人間は獅子や虎のやう

な猛獸よりも遙に劣つて居るといはねばなりません、もし女の精神的が男より薄弱だといへば、全體この薄弱には誰がしたと反問せねばなりません、自然の日光と空氣とに任して置けば喬々たる大木になるべき松も杉も檜も、その他に於ける一切の樹木も、これを無理に小さい鉢の中に根を縮めて押込めば、同じ育つにしても太く伸びる事は出来ません、つまり男より女の精神的に薄弱な點ありとすれば、それは取も直さず幾世紀の間、男の專横を自白した明かな立證で、おのれが自然に反し道理に背き申譯のない事をして置いて、その罪を他に嫁するとは言語道斷、卑怯未練、風上にも置くべき沙汰ではありません、

いはゆる男子的の態度と稱して、平生の自慢が實際ならば、此際に寧ろ罪を謝し過ちを改めて我々婦人のため大いに悔悟の力を盡さねばなりません、それを要求せられても警告せられても應じないとは、まア何たる無恥の醜態ぞせう、

醫學上より見たる男女優劣論の如きも、たゞ現在の結果を不完全なる統計的に示したのみで、そもく眞理の原因に溯つた人道上的研究ではありません、つまり自然の結果でなく、殊更男子のために今日の如く強ひられた其結果を今日の目方で量られて居るんです、

生理上と人道とは全くの別論で、男女兩性の異なるを以て男女優劣の理由は生じません、實は男女それ兩性の異なるがために、却て男女の對等たるべき人類の眞意が現はれて居ります、男女いづれの一方が缺けても人間といふものゝ存在を没却して、零に歸するのが何よりの確な證據ではありませんか、男ばかりで人といはれず、女ばかりで人といはれず、男と女を相合した上に始めて完全な人間といふ名稱を附せらるゝにも拘はらず、由來この人間は殆ど男子のために獨占せられて居りました、

男女を合して人間といふ上に、最も明かな條件は結婚で、第一その結婚なるものは、今日のところ、果して如何なる實際を呈して居りますか、今日この結婚なるものを一言で盡せば、女が男の捕虜となり、妻は良人のために生涯を囚れることで、つまり嫁するといふのは女の幸福と自由とを失ふ事になつて居ります、

良人は横に足を抛げ出して寝ながら無理をいうても、その妻は行儀よく坐つて其無理を聞かねばなりません、その良人は酒に酔うて亂暴する時、その妻は泣いて謝らねばなりません、その良人は山海の珍味を並べても、その妻は反對の粗食お茶漬で堪忍せねばなりません、その良人は出入に無言の顔で差圖しても、その妻は脚下に謹んで微笑を含みながら履物を揃へねばなりません、花も月も良人の許しを得ざれば家に閉ぢ籠つて居らねばなりません、海も山も良人の機嫌を損へば

門前一步も出る事は叶ひませぬ、その良人は他に向うて妻以外の醜業婦に戯れても、その妻は嚴格なる貞操と温順とを守らねばなりません、その他あらゆる總ての上に於て、良人は絶對の自由ですが、妻は絶對の束縛を受けねばなりません、加之も一朝一點その良人の意に満たざる事あれば、その妻は理由の有無に拘はらず、是非に關せず、忽ち良人のために去られ良人のために罪せられねばなりません、

そもく女は以上の堪へ難き侮辱を受けても、やはり男の捕虜とならねばならないものですか、そもく妻は以上の忍び難き虐待を強ひられても、やはり貞操を守り温順を守らねばならないものですか、

事ここに至りては、もはや残忍酷薄を常とする男子に對する前、まづ我々の婦人中、かゝる侮辱と虐待とを甘んずる女子に向うて問はざるを得ませぬ、

生ける女の聲はこれを冒頭として、單刀直入、ますく男子に肉薄呐喊し、叱咤鞭撻いよく女子を鼓舞獎勵し、二百ページの文字に白髮老顔の眼を光らせる藤原秀子、ありと現はれ来りぬ、

「ねエ、貴嬢、生ける女の聲を御覽なすツて」

「あら、酷い事、いくら私だツて、今日の女子ですもの、あれを見ずに居られますかね、幾度、くりかへして讀みましたか」

「貴嬢、どう思ツて、あれを讀んでから、どういふ感じが起りましたか」

「さうねエ、つまり男子の手から何か、今まで無理に奪はれて居たものを取返したやうな氣がして、愉快です事、自分といふものが急に心強くなりましたワ」

「全くよ、考へて見ると、今までは女子みづから生きて居たのでなく、たゞ男子の都

合上と男子の性慾を満たすがために用のある間だけ生かされて居たんですねエ、都合が悪クツて用がなくなれば、御苦勞ともいはれないで、すぐ精神的に殺されるんですから」

「ほんとに男子といふものは残酷ですよ、戀も愛も女子を玩弄する一時の方便で、魚を釣るやうな氣で居るんですよ、年中、いろんな河岸を變へて釣竿を垂れてる工合、憎いぢやありませんか」

「そして澤山釣れば、艶福家だと自慢して威張り散らすんですもの」

「ですから、生ける女の聲の中に、かう言ツてあるぢやありませんか、これまで幾數百年の間、我々の姉妹が精神的に殺されて肉體的に弄ばれた、その怨恨を今日の男子に向うて復讐するのではありません、たゞ今日の男子に向うて幾數百年の過れる事を改めてくれと要求するんです、と、ね、要求は要求ですが、あの復讐の二

字、貴嬢、どう考へて、復讐しないといふのは寧ろ復讐せよといふ意味ぢやアないでせうか」

「意味でなくツても私、その意味に取りますワ、自然さうなりますよ、長らくの間、さんざ今まで窘められぬいて、その窘められる事がなくなると同時に、まさか、有難うとも、お禮はいへませんもの」

「實は私も、さう思ツて居ますの」

「しかし窘め返すには、窘め返すだけの手段を考へねばなりませんね、男子の方も今までと違ツて、もはや自分の自由にならないものとするれば萬事、なか／＼油断をしませんからねエ」

「ですから結婚の時、ちやんと堅い、動きの取れないやうに條件を極めて置くんですよ」

「どういふ工合に」

「つまりね、結婚の時、媒酌人や雙方の父母親戚が立合の上、出来るなら公證人も呼んで来てさ、いろ／＼と婦人の方に最も利益の多い事を遠慮なく、遺憾なく契約して置くんですよ」

「あら、まア」

「だツて、このくらゐ冷くして置かないと無効ですよ、男子といふものは女子を得んとする其、その女子に對する最初は口でこそ、神聖めいて戀とか愛とか優美な事を言ツて居ますが、實は一種の色情狂ともいふべき状態で、心にもない嘘八百のあるだけを盡して、あらんかぎりの深切と眞實を見せるために、どんな事でも承知するもんですから、そこへ附け込で、男子の常用手段に供する甘言を悉く條件へ書き入れて仕舞ツて、さアいよくといふ時、その實行を厳しく迫るんですよ、ね、ど

うせ一時の甘言で、出来ない事を契約したんですから、これが婦人に取って最も有力な武器でせう、こんな武器で迫りたくなくツても、これほど不可能の自業自得で責め付けないと、男子といふものゝ元來が、既に得た後の我々婦人に對して實に、輕薄な残忍なもんですからねエ」

「ほゝゝゝなるほど名案です事、それでは例の魚釣流も、出来ませんワねエ」

「出来ないどころですか、釣竿なんか見付け次第に、ぼきく折ッて仕舞ッてやりませワ」

「さうねエ、折ッて仕舞ッた竿の尖端で、眼や鼻を突ツついてやりたい事」

「そこまでしなくツても、男といふもの、他に向うて自分の情慾なり性慾なり到底、行はれないものとするれば自然、餘儀なく一夫一婦を守りますよ」

「私、餘儀なく守られるやうでは、いやですワ、是非とも眞實に全身の愛を捧げさせ

なくツては、そして、其愛が、もし私の試験上に満点を呈しない時は、すぐに立派な理由として、何時でも自由に離婚の出来るやうでなくツては」

「あら、あんまりです事、満点は酷いワ、せめて七八十點ぐらるで及第さして、宜いんでせう、さうでないと、我々の方が却て魚釣流だと、いはれますよ」

「そりや貴嬢、間違ッてますワ、男子の魚釣流は正當の妻があつて、その妻以外に他の醜業婦なんかと戯れるんでせう、私のいふのは立派な理由の下に明白な離婚を要求して、それから自分の理想に叶ッた相手を、また良人とするんですもの、愛を重ねるんでなく、愛を新にする意味ですよ」

「だッて、全くの理想に叶ッた良人は、さう實際に於て、ありませんよ、また愛を新にするのは、宜いとしても、生涯の間、さう貴嬢、新にばかりして居られませんからねエ」

「ですから私、もし不幸にして最初の良人が、そんなであれば、生涯を三人に極めて居ますの、もし不幸に不幸を重ねて、三人とも自分の意に満たなければ、その以後を獨身で送りますワ」

「ほ、ほ、ほ三人も新にして居る内に貴嬢の方が、古いお婆アさんになつて仕舞つて、わざ／＼殊更に、もう獨身の必要も何もないぢやアありませんか、ほ、ほ、ほ、それぢやア貴嬢、生ける女の聲にある獨身の意義とは、まるで違つてますもの、あの獨身は、堪へ難く忍び難き男子の侮辱を蒙つて獸慾の提供物となるよりは、豫め婦人も自個の生活をなし得るだけの手藝職業を覚えて置いて、かゝる場合に男子の經濟的壓迫を受けないやうに立派に獨身生活をせよ、そして男子に十分の戦ひを開けといふんですもの、三人を試みた後お婆アさんになつての獨身とは、ほ、ほ、ほ、まるで違つてますよ」

「おや、さうでしたかねエ、それぢやア最初の一人で、もう獨身生活を営まねばなりませんの」

「まア、さうですなエ」

「あら、心細い事」

「なぜ」

「なぜでも貴嬢、最初の一人だけでは私、考へますワ」

「どう考へて」

「いえ、今、すぐに考へるんでないの、も一度あの生ける女の聲を、よく讀み直して見て二三日、考へるんですよ、たゞ最初の一人では、つまりませんもの、折角こゝまで来た復讐の意味になりませんもの。」



生ける女も死せる女もあるモンか、女は稻の穂と一般、その稔るに従うて差俯き、黙ッて居るに限るといふ論鋒を頭上より浴せられて、ますます反抗的に婦人倶楽部の會員となるもの多く、わたしは自殺して居ります魔酔劑をかけられて居ります、この侮辱を良人どうして下さるといふ妻に攻められて、癩癩まぎれに男子倶楽部の會員となるもの多く、たしかに藤原秀子の著作一部は、由來の會員以外、あらゆる男女の間に一個の爆裂彈を投ぜり、

## 其六

婦人倶楽部の砲火第一、生ける女の聲を刊行せし後、また突如として會員全體に左の印刷物を發せり、  
加之も三錢の返信切手封入は、一舉一動、どこまでも缺陷なき例の藤原秀子式、

婦人倶楽部の設立に關する主義綱領の信條以外、さらに其後の形勢に餘儀なく積極的態度を以て急激を相發し置き候六個條の内、今日また免れ難き現在の必要に應じ改めて其第三と其第二を再び我會員の前に呈するの已むなきに立至り候、

(一) 従來の婦人倶楽部は社會の慣例と家族の風習とを及ぶかぎりの自制力に容認せしが今後の婦人倶楽部は主義のために何物をも敵とするの行爲に躊躇せざべし、

(二) 婦人倶楽部の會員にして倶楽部の招集を受けし場合は人間の不可抗力以外その招集に應ずべき義務を有すべし、

そもくこの二個條は多少の時期を要すべき點ありて、なるべく今日まで實行を見合せ居り候處、もはや其時期と其實行に相迫り候間、明後日午後

一時を期して當俱樂部へ御集合下れたく候、

但し今日いまだ古き慣例の柵に閉ぢられ古き風習の門に遮らるゝ我婦人に對して、わづか一日の用意に人間の不可抗力以外を強ふるは前途希望のため却て現在の不幸と澁滞を増すの恐れ有之候間、家族家庭の關係上、否、もし理由なき壓迫によりて集合の叶ひ難き節は、その叶ひ難き事情を事實ありのまゝに一點の修辭なき言文一致體を以て報告的に御通知下さるべく候、婦人俱樂部は其事情と事實とに最も慎重緻密なる注意を拂うて他日の有力なる材料と致すべく候間、たとひ當日の出席なきも婦人俱樂部の精神は集會の會員と同一の満足を以て歡迎いたし候、婦人俱樂部の建築は上下三層を合して千五百人内外を容るゝに過ぎず候間、順次に會員集合の日割上、この招集は第一日として一千人に郵送いた

し候また當日集合の會員は封入の郵便切手を御返戻下さるべく候、零碎の資金も此際に於ける多大の用意たる事を深く深く御承知下されたく候、

婦人俱樂部

藤原秀子

これを敵より見れば、いかにも巧なる挑發的の教唆狀なり、いかにも深酷なる陰險的の刺激文なり、いかにも婦人的の特徴を發揮せし奸佞手段なり、この返信料を封入して集まり得ざる味方の不平不満を大膽なる無遠慮に訴へしめんとするが如き、或は第二の砲火として天下に出版發行するやも知るべからず、その郵便切手を取戻して集せる味方に軍用金の必要を直感せしむるが如き、或は却つて寄附を募るの具なるやも知るべからず、加之も會員の集合を千人づつの日割に當て、其多數を誇れる示威運動

の一面また受付の机上に家族家庭の壓迫せる事實を山の如くに積み上げて、ますます味方の悲憤を鼓吹すると共に愈々その團結力を鞏固ならしめんとするが如き、いづれにせよ、敵の目に映ぜし藤原秀子は案外の縦横無盡、なるほど油断のならぬ横着婆なり、

「おッ母さん、ちよいと出て來ます」

「いけません」

「お友達と約束して今日、是非行かなければならないんですから」

「いけません」

「なぜ」

「なぜでも、いけません」

「どうしてですの」

「お父さんの御不在中、出ては、なりません、もし出るなら、お父さんに伺ってから出なさい」

「だって、お父さんのお歸りは、遅くなりますもの會社が午後の四時ですから、もしまた外へでも廻れば、おッ母さん、どうせ夜ですよ」

「夜になれば夜、伺って置いて明日にしなさい」

「それでは用が足りません」

「用が足りなくツても、よろしい」

「あら、あんまりです事、用が足りないとすれば別に、わざわざ出る必要も」

「なければ猶更、出るに及びません、去年、もう學校を卒業して仕舞って、今年、十九ぢやありませんか、來年は二十歳ですよ、うかく外へ出る時ですか、お嫁入の

前です」

「おツ母さん、それは私の一身上に關する事で、今日、出るのは只、ちよいと」

「ちよいとでも何でも、出しません、もし出るやうな用があれば、おツ母さんと同伴に出る外、獨りで外出は一切、なりません、お父さんから嚴しく、さう言はれて居るんです、もし無理に出れば、おツ母さんが申譯のない事になるんですよ」

「まア、急に改まって、むづかしい事になりましたのねエ、私、禁足せられてるんですか」

「何とでも勝手に汝の思つた通り思つて居なさい、親は當分、汝を出さない事に極めたんだからね、それとも汝親に反いてまでも出なければならぬ用があるのかね、あれば、其用を今こゝで言つて御覽、他人には兎に角、自分の親に向つて、いへないやうな用はない筈だ、まして嫁入前の女の子が、十九にもなつて」

「おツ母さん、さう仰しやれば私、いひますがね」

「お言ひ、さア言ひなさい」

「しかし、おツ母さんと、私と、よほど時代が違つてるんですから、困りますワ、すべての上に於ける思想が、まるで反對ですもの」

「反對だから、おツ母さんが心配するのさ、汝は今日、あの婦人倶楽部とかへ行くだらう」

「さうです」

「さうです、すみませるか、此ごろは段々と世間の風儀が悪くなつて寄席や演劇でさへ、出すのを喧しいお父さんだよ、それに汝、まア何だね、あんなところへ」

「あら、おツ母さん酷い事、婦人倶楽部は寄席や演劇よりも悪いんですか、あんなところ、あれは今日の女子に、私なんかの前途に、最も幸福あらしめるところな

ンですよ、おツ母さんの時代は、おツ母さんの時代で、お父さんに對する貞節な良妻でせうが、また私は私で、やはり私の時代に作られた思想があるんですから、妻としても自然、おツ母さんと同じでは居られませんよ、つまり男女ともに人といふものは、それ／＼時代の要求に應じて行かなければ、ならないんですからねエ、私がおツ母さんの時代や思想を冷笑する事の出来ないと共に、今日おツ母さんも私等の時代と思想を壓迫したり阻害したりする事は、無理なんですよ、もし手近な眼に見える事に軽く譬へて言へば、島田や蝶々が急に束髪になつたからつて、おツ母さん、それが不思議でもなく、また舊式の丸鬘を結び通した親に對して不幸にもならないでせう、花簪がリボンに變つたつて下駄が靴になつたつて、少しも怪しむべき事で、ありませんもの」

「おや、大變に汝は學者だ事ね」

「おツ母さん、すぐ、それだから困るんですよ」

「何が困るの、どツちが困つてるの」

「だつて、さうですもの、おや汝は大變に學者だねといふ言葉は、つまり大變に汝は馬鹿だねといふ意味でせう、どうも古い人には何事によらず、きつと、それがあつて、さういふ物事の理由を考へて下さらないで、たゞ自分の氣に入らない事は一切、頭から悪いものと極めて仕舞つて」

「善いか悪いか、おツ母さんには少しも分らないからね、もう手に合はないからね、兎も角も、お父さんの御歸りをお待ちなさい、おツ母さんは古い人で、とても汝には叶はないから、どうせ、いふ事を聞く筈がない」

「あら、おツ母さん、それぢア私を無理に、強ひて不幸なものに、なさるんですよ」

「どこの親が好んで我娘を不幸なものにします、わざと汝の方から親に向つて、不幸

をするンぢやアないかね、自分が不幸な真似をして置いて、その不幸を親がさしたといふ道理は、いくら世の中が變つて來ても、まさか、ないだらう、それとも、あるのかね」

「さう、いちく／＼押へられては私、いふ事があつても、いへませんワ、此ま、今日は出ずに黙つて居ります、出なくつても、出たと同じ用の足りる方法があるンですか、おツ母さんは只、眼前の現在さへ自分のいふ通りになれば、安心なんでせう」

「それ、すぐ、それだ、汝は、たゞ親の眼前だけ繕つて置けば、何をして、それで宜いと思つてるンだらう」

「いゝえ、おツ母さん、また意味の取りやうが違つてますよ、困りますワねエ、さうでは無いンですよ」

「あつても、なくつても、さうだよ、汝の兄は随分、小さい時から悪戯はするし喧嘩

はするし、大學に居る今でさへ寄宿舎の荒れ大將で、なか／＼人の云ふ事を聞かない性質だが、親には却つて女の汝より優しいところがあるよ、幸ひ今日はお父さんに頼みたい事があると云つて居たから、今に歸つて來るだらう、おツ母さんのいふ事が古くつて無理か、汝のいふ事が道理に叶つてるか、兄さんに聞いて御覽、もう來年は卒業して法學士になるンだもの、まさか分らない筈が、おや、それ、いうてる間に歸つて來たよ」

「あら、おツ母さん、兄さんは亂暴だから私、きらひよ、むやみに頑固で」

折しも角帽を手にせる兄、いかにも一見してボートレースのチャンピオンたる體格、ぬつと入り來りて無雜作に坐しながら、母子の間をじろ／＼、

「おツ母さん、また妹が、何か生意氣な事を言ひ出してるやうですね」

「さんざ今、云ひ込められて困つてるンだよ」

「あら、私」

「黙ッてる、あらも私もあるか、けしからん妹だ」

「兄さん、あんまりですワ、どういふ事か、その理由も聞かないで」

「聞かなくッても十分だ、妹が悪い、断じて悪い、決して善くない、ヒッ込んでろ、おッ母さんも亦、いちく妹のいふ事を氣にかけて相手になさるから、いけませんよ、委細かまはず、びしくと頭の脳天から吐り付けておやんなさい」

「ところが汝、びしくおッ母さんが、やられるからね」

「全體、どういふコッテすよ」

「どうッて今日、あの婦人倶楽部とかへ行くといふからね、兎に角お父さんの御歸りまで、やる事は出来ない、お待ちと言ッたのが、原因で」

「婦人倶楽部、おッ母さん、此妹、婦人倶楽部へ出ようといふんですか」

「兄さん、此妹とは、何ですの」

「此妹というたのが、どうした」

「どうも、しませんが、あんまりですワ、此妹だなんて、いくら妹でも、あんまり侮辱ですもの」

「おい、そもく侮辱といふ意味を知ッてるのか、どうかすると此ごろの女ども、頻りに侮辱々と吐すよ、考へて見ろ、實際また侮辱されるほどの立派なものを持つてゐるかい、つまり侮辱を受けて怒るだけの品性と資格とを備へてるかい、自分が都合の悪い事は悉く侮辱で、自分の便利な事ア悉く自覺だらう、は、は、は、しかし笑ッても居れない、他人でないからね、おッ母さん途中で口を出しちやア、いけませんよ、たゞ聞いて居て下さいよ、これから此妹に兄として問ふ事があります」

「兄さん、私、兄さんに何も詰問せられる理由は、ありませんワ、私が婦人倶楽部へ

行かうと行くまいと、私の自由な思想上の行爲で、別段兄さんの關するところでもなく、また兄さんに禁じられたり遮られたりする筈はないんですからねエ、おツ母さんにだつて私、わざ／＼子として親の感情を損ねようとしたんではありませんの、勢ひ餘儀なく時代の違つてる結果ですよ、現に兄さんでも、お父さんと悉く何事も一致する點ばかりでは、ないんでせう、その一例を挙げれば、お父さんは是非、醫學士になれといふのを兄さんが自分で勝手に、法科へ這入つたんですもの」

「は、ア、阿父が醫者になれといふのを乃公が法科へ這入つたから、妹は婦人倶楽部へ行くなといふ母の言葉に反いて、命令に反いて、是非とも行くといふ理由が出るんだな」

「まア、いうて見れば、さうなんでせう」

「ところで今日、その法科に這入つてる乃公を、阿父が非認してるか、それがため今

日、乃公は阿父に反いてるといふのか、第一また同じ大學で醫科から見た法科が親に對して、どれほどの罪だ、どれほどの不孝になる、乃公の法科と妹の婦人倶楽部と同一物になるものと思つてるのか」

「同一物になる、ならないは措いて、それでは兄さん、今日あの婦人倶楽部は婦人そのもの、存在上、どれほど害があつて、どれほど悪いんです」

「どれほど害があつて、どれほど悪いか、殆ど程度の知れないほど害悪の深いものだ、ありア時代の要求に應じて婦人の自覺に出來たもンぢやアない、時代の缺陷に乗じて婦人の間違ひに生じたもンだ、いくら流行でも好奇心でも、間違はずに汝、あんなもの出來るか、人の身體でいへば不養生から來る病氣だ、もし社會の衛生上からいへば清潔法の行き届かないところにバチルスの發生すると同じこつた、加へも現在に法律上の犯罪を構成しないだけ猶更ら以て人生を深く過るべき害毒の源泉



だ、さういふ危険な場所は人にいはれずとも自ら避くべきが當然で、わざ／＼立寄るなど訓戒する親の慈悲を振切つて無理に行かうとする妹、もはや或意味に於て檻禁するの必要がある、いかに思想の自由は自由でも、そんな自由は眞理を失つた我ま、勝手な自由だから宜しく束縛して可なりだ、盗賊を縛ると同じこつた」

「おや、ロサン、兄さんの見る婦人倶楽部は、さういふモンですか、さういふ見方ですの」

「知れたこつた、それ以上に見えるかい」

「まだ兄さん、生ける女の聲を聞かなくつて」

「馬鹿、あんなものが聞く必要も讀む価値もあるモンか、ありやア猫婆の唸聲だ」

「それぢやア兄さん全然、まるで、お話が出来ませんわ、たゞ一時の感情に走つた罵詈譏といふ外に私、何の響きもありませんわ、時代の違つた、おツ母さんや、お

父さんは兎も角、今日の時代に生れて今日の時代に見さんのやうな人は、まア珍らしい事、ふしぎですなエ、つまり時代に要求される事が無いからでせう」

「何だと、乃公が時代に要求されない人間で、妹が時代の要求に應じた人間だといふンだな、つまり乃公は今日の不用人物で妹は今日の必要人物といふンだな、よし、ぢやアそれとして、もし其時代なるものが間違つて居たら、どうする、時代に要求される、されないと論より時代そのもの、研究が第一だぞ、大體あの婦人倶楽部が頻りに叫ぶ時代の程度と標準は、どこにあるんだ、たゞ新しいから生命があるだけでは新しい理由が分らない、一切の過去を無視して古いものに眞理の含まれない解釋もしてくれ、その理由と解釋のしやうで乃公に考へがある、おツ母さん、あなた黙つて在らつしやい、あなたが口を出すから此妹、ますます圖に乗つて、かういふ不埒な、けしからん事をいふンです」

「おツ母さん、私もう兄さんと話しませんわ、すぐ兄さんは眼を剝いて、どうです拳を握り固めて、まアあれですもの、自分は最も人權を重んずる法律を學びながら監禁も束縛も平氣ですとさ、盜賊を縛ると同じ理窟で來られては叶ひませんわ、私、女子ですから腕力だけは男子に負けますワ。」

「わたし女子ですから腕力だけは男子に負けますワ、畜生、いちく吐す事が癩に觸る」

「さう癩に觸へるより兄さん、少しは道理に觸へて下さいよ」

「貴様のやうな女に、道理も絲瓜もあるかッ」

「あれッ」

おもはず拳を振り上げし兄、おもはず飛び退きし妹、母は驚いて左右へ引き分け掻き退け、

「まア汝達、何をするんだね、お父さんが居ないと思ッて」

「なアに、おツ母さん、あゝいふ妹は口で説いて聞かしても無効ですよ、無効だ畜生、鐵拳の外に結論のない女ですから、どツか三四世紀も以前の氣風を持つて山の奥で猪や猿を相手の獵夫へでも嫁に遣ッて仕舞ひなさい、うかくすれば鐵砲の臺尻で叩き付けるやうな亭主を持たせないと、とても無効です」

「御心配に及びませンワ兄さん、私は私で、また理想の良人を持ちますからね、私よりも兄さんの妻になる人、まア何といふ不幸な運命でせう」

良人は四十前後の高等官三等、されど一點の吏臭も帯びざる不羈磊落、あれを先の間へた役人には惜しいぞ、寧ろ今のうち野に下して、思ふ存分に腕を揮はせたいといはるゝほどの男、妻は三十前後なれど巧なる人爲的の裝飾美を加へて二十四五にも見ゆ

るハイカラ風、また今日の女子としては殆ど遺憾なき教育を受けし身、

「おい、汝、まだ出ないのか」

「良人、私の出るところを御存じですの」

「わかッてるぢやないか、丸の内へさ、例の婦人倶楽部だらう、遅くなるぜ、乃公に構はず、さッさと早く出るが宜い、苟も今日の婦人としては、是非とも行かねばならないところだ、加之も昨日、何だか急に會員の招集令が來たらう、既に會員たる以上その會の急務に外れては、いけないよ」

「いづこの良人も妻に對して警戒を怠らざる折柄、甚だしきは親類縁者の加勢を乞うて四方の出口を塞ぐ防禦の眞最中、かう開け放されては流石の細君も却ッて聊か妙な心地、

「これから、まるツても、よろしう御坐いますか」

「いよく、良人は平氣の顔色、

「あゝ宜いとも、別段、たいした用はなし、たとひ用があツても外のこツちやアない遠慮なく行きなさい、乃公の俾に乗ツて出ても差支ないよ」

「しかし良人、今日は日曜ですが、終日、お在宅ですの」

「乃公か、乃公も出るよ、ぶらく」

「何方へ」

「實は二三の友人に内々、約束した事があツて、ちよいと、は、ちよいと乙な、面白ところへ行くんだよ、は、まア乃公の事を置いて汝、先へ出なさい、乃公の方は時間に制限がない、どツちかといへば寧ろ夜にか、ツた方が都合上、宜いんだからね」

細君、ますく變な心地、

「おや、さうですか」

「をかした顔をするね」

「だツて、ちよいと乙な、面白いところとは全體、どんなところですよ、お友達と内々で」

「さう、聞かなくツても宜いぢやアないか」

「承ツたツて私、お止め申しませんから」

「止めても行くんだから、聞く必要は、なからう」

「ですがね良人」

「何だい、ぐづぐづと汝、汝こそ早く出ないと時間に後れるぜ、汝の方が午後の一時だらう」

「いえ、少々ぐらゐ、後れても、宜しいんですよ」

「ぢやア乃公の方が先へ出よう、かういふ時は洋服よりも、やはり袖のある着流しに限るね、汝、さう急がなけりやア出してくれ、おかけで自分で出して着るだけで助かつた、面倒だからなア、はゝゝゝ」

「出しますが良人、どちらへ」

「まだ汝、それを聞いているのか、困るねエ、實は乃公にも、どこへ行くか分らないんだよ、たゞ友人が内々この乃公を面白いところへ連れて行くといふ約束だからね、まづ友人を訪うて見て、その上でなければ、わからないよ、どこだらうな、意地わるく先をいはないだけ猶更乃公も、行きたい氣になるんだが、人間といふもの、妙なもんだなア」

細君、ますます妙なものに引き止められて、今更出るにも出られぬ心地、

「もし私、けふ婦人倶楽部へ出ないとすれば、良人も、お出になりませんか」

「なアに汝、そんな馬鹿な事があるもんかね、汝が行くべき婦人倶楽部へ行かないで、も乃公は出るよ、婦人倶楽部へ汝の行く行かないは今、乃公の出る出ないと何等の關係もない、全然この没交渉だ、は、は、は、また乃公は氣の小さい神經質を帯びた世間の奴等と違つて、いかなる事も、いかなる時も、おのれが最愛の妻を疑ふべき餘地がない、あくまで信じてる以上、その妻の出入は自由自在で、どこへ行かうが出ようが更に構はないと共に、また妻のために信じられる筈の乃公が出先を、いちいち妻に聞かれるのは甚だ善くない氣持だ、何だか他人と他人が寄り合つてるやうだ、それほど互に安心の出来ない良人は良人でなく妻は妻でないんだからねエ、や、わざ／＼着換へるに及ばない、兎も角も乃公は先へ出るぜ」

「良人、良人、ちよいと待つて下さい」

「何か、急に用があるかね」

「別に急な用も、御坐いませんが、私、良人に」

「乃公に何だい」

「良人は、私の、婦人倶楽部へ行くのを、不愉快に思つて在らつしやるんでせう」

「おい／＼今度は乃公の方が遅くなるよ、現に今、さう云つてるぢやアないか、もしそれが不愉快なら汝に早く行けの先へ行けのといふかね、乃公の俵に乗つてまで」

「ですがね、良人、何だか私、今日は進みませんわ、どういふもんか、行かなくつても宜いやうな氣がしまして」

「進まなければ止しなさい、行きたければ行きなさい、どつちでも一方、はつきりと極めるが宜い」

「止します」

「止す」

「はい、止します、止しますが良人、良人も今日お出になるのを止して下さいな」  
 「両方とも止して、どうするんだ、両方とも出たいところへ出た方が、両方とも宜いぢやアないか」

「さういへば、さうですがね」

「さうなら、さうしよう、互に折角、かう出掛けたのを急に出ないのは却て互に面白くないもんだ、汝が外へ出て池人の妻ぢやアなし、乃公が外へ出て他人の良人ぢやアなし、やはり夫婦は夫婦で、どうせ間違ひなく雙方こゝへ歸つて来て、喧嘩も議論もしないんだからなア、はゝゝゝさア氣持よく互に出よう、淡泊に快活に出るとしよう、強ひて内に引ッ込でるのは何物をか腐敗さする基だ、出た、出た、大いに出るべしだ」

「ねエ良人、私、今、ふとした妙な動機で、これまで熱心な會員になつて居た婦人俱

楽部に多少、疑念を生じて來ましたよ」

「そんな事は今、どうでも宜いぢやアないか、今日に限ツた事でない、出掛けた乃公は出るよ」

「まア良人、さう良人、少し私のいふ事も、聞いて下さいな、出る出るツて實際、それほどに、さし迫ツた急用でも、ないんでせう」

「迫ツた急用でないから今まで饒舌ツて居れるのさ、しかし出るとなれば早く出た  
 い、聞くべき事は聞くが、長たらしい道行は御免を蒙るぜ、乃公は總ての上に結果論者だからね、右とか左とか、黒いとか白いとか、詮じ詰めたところを一言で盡してほしい、全體、何だい」

「私、婦人倶楽部を、脱して仕舞ひませうか」

「そりやア汝の勝手だよ」

「私、良人の妻ですね」

「左様」

「妻の進退は、良人に相談が出来ますのねエ」

「いかにも、相談すれば相談に乗るべきが當然だ、しかし乃公は相談を促さない、決して相談しろと命じない、始め汝が婦人倶楽部へ入會の時も知ツて居たが一言、さうに何ともいはない代りに今、また脱するに就いても去るに就いて關せず焉の御勝手次第だ、は、は、は、つまらない事に世間の夫婦は雙方より互に立入り過ぎるから、却て不快な問題が夫婦の間に起り易いんだ、そんな事、乃公は大嫌ひだ、嫌ひのみならず面倒で困る、互に疑はなければ萬事に放任主義が宜いね」

「いくら開放でも放任でも、凡そ程度のある事で、もし妻として良人の指揮を乞へば、乞へるでせう、ねエ、相談とは別ですから」

「無論だ」

「では私、今まで良人に相談しなかつたのは悪いとして、あらためて良人に指揮を乞ひますワ、どうでせう、脱會しませうか、そりやア汝の勝手だといふ外に何とか、言ツて下さいな」

「は、ア、なるほど、今まで婦人に幸福を與へらるゝものと思ツて居た婦人倶楽部に汝、急に何等かの動機で、さうぢやアないと思ツたのかね」

「それほど、極端から極端の變化でも御坐いませんが、つまるところ、わざく、婦人倶楽部の會員となり、わざく、また家庭の用を差置いて、婦人倶楽部の招集などに應じないでも、婦人倶楽部の精神と主義とは、婦人倶楽部の外でも十分、立派に發揮し得らるゝものと考へましたから、それで、イツそ脱して仕舞ツた方が」

「いけない、もし今日の汝として乃公の指揮に従へば、いけないと斷言する、脱する

に及ばない」

「おや、では良人、良人は最初から婦人倶楽部の主義に、賛成なすツて在らしツたの」

「賛成して居ない」

「あら、をかしい事、あまり矛盾ぢやありませんか、婦人倶楽部の主義に賛成して居なくツて、其妻が婦人倶楽部を脱會するに、いけないといふ理由は」

「いけないよ、いけんぢやアないか、これほどの略易い理由が分らないとは、なさないね、現在、今も言ツた通り乃公は右とか左とか、黒白いづれか一方、きツぱり結論する人間だ、もし汝が婦人倶楽部を婦人の幸福場所にあらずとして、悪いと見定めた上の脱會ならば兎も角、さう極端から極端でもないといふやうな、中途半端で曖昧な未練らしい不得要領の脱會は、婦人倶楽部に對しても卑怯千萬だ、寧ろ脱

會せずと其まゝ大いに進んで婦人倶楽部のため、どうかなるか、やれるだけ、やつて見るが宜い、二の足を踏んだ事に最後の好結果は得られない、乃公は婦人倶楽部に反對だが婦人倶楽部の會員たる妻に反對しない、つまり妻の意志を枉げない、強ひて意志を枉げた妻よりも其まゝ思ふ通りに枉げない妻を開放して置く方が面白い、却て不愉快の點が尠い、はゝゝゝなアに萬一、もし、その開放程度を妙な工合に間違ツて來りやア、離婚するだけのこツた、近ごろ動もすれば女の方から離婚問題ばかり持ち掛けられて頻りに狼狽へ廻る野郎殿が多いので困る、しかし乃公は妻に對する冷却の意味でない、寧ろ乃公は妻に對する最愛のため開放するので、その開放は愛情から溢れ出した開放だ、簡單明瞭、さらに何等の疑惑も不安も挿む必要がない、はゝゝゝおい汝、いよく出ないのかい、乃公は出るよ」

かういふ良人に對しては流石の細君も聊か拍子ぬけの體、



「まだ良人、もう少し伺ひたい事が」  
 かういふ細君に對しては亦これ一種の禁足法、  
 「ぐづ／＼伺ツてるより汝の自由に考へて置くさ、今日は乃公の方が開放だ、はゝゝ  
 はゝゝ」  
 細君、いかに重々しく面倒に取組んでも、至極お手輕の平氣に受け流す男、さつさと  
 其まゝ門外にステツキを引摺りながら、

生ける女の聲を開戦第一の砲火として、さらぬも待ち構へし天下の婦人に思はず関を  
 作らしめ、また不意の招集令に社會あらゆる階級の家庭を動かして、その來るものは  
 熱烈なる演説の下に猶更狂氣の如く奮起せしめ、その來らざるものより不平滿々の投  
 書を山の如くに集めて武器とし、いよく／＼今や男子軍の本營に肉薄呐喊せんとする婦

人俱樂部の勢ひ凄じく、敵の總將たる田口雄太郎いづくにある、敵の遊軍たる長田健  
 三、そも／＼睡れりや否やと叫べる藤原秀子の面貌、あり／＼と見るが如し、

## 其七

女軍に對する男軍の砲火第一は何物ぞ、

知らぬ貌の默殺、冷やかに笑ふ冷殺と笑殺、つまり我は汝と戦ふを恥づといふ、その  
 時も場合も既に過ぎたり、

勢ひ相迎へて戦はざるべからず、

されど著述に對する著述は聊か機先を制せられて今更立ち後れの氣味あり、文字上の  
 反駁攻撃は遊軍の長田健三これを引受けて、生ける女の聲を大砲とすれば日々の朝夕  
 新聞に間斷なき小銃の連發、この方面だけでも滿都の讀者を熱狂せしめて、男女の戦

ひは正に 酣なり、さらに本軍を率ゐるし田口雄太郎は豫ての用意、別に一種の機關砲を四箇所に備へて、どつと一時に打ち出だせしは觀覽無料の活動寫眞、敵は固より味方の會員さへ、この以外なる突飛的の奇兵に、あつと驚きぬ、  
 加之も四箇所の活動寫眞は、定員七百五十人づつを一日に五回の入替、うつし出せるは悉く女子の不徳と缺陷とを擧げて、娘の父兄に對する我まゝ放埒、妻の良人に對する不貞腐れ、母の子に對する無慈悲冷酷、その他に於ける人生の悲惨、家庭の破壊、乃至また婦人虚榮の滑稽百出、いちくこれに遺憾なき猛烈の説明を加へて、わいゝく押寄せし群衆雜踏を吸ふが如くに、さア入らツしやい、入らツしやい、わざと殊更ら俗に廣く解し易き流行第一の方法を取ツて、以て無遠慮なる大膽に敵の中堅を衝きしのみか、無代で面白いものを見せるといふは天下これより恐るべき勢力なし、

新聞紙上の小銃連發以外、活動寫眞四箇所の機關砲以外、また別に論客の一隊を作りて、いたるところに婦人攻撃の演説を催し、さらに好奇心の紳士團をして、おのゝ用なき時は盛んに自動車を四方へ走らせ、知己朋友を説き伏せて味方に引き入ると共に隙さへあれば細君へ膝詰の直談判、内外表裏こゝに相應じて怒濤激浪の岩坡を嚙むが如くに押し寄せたり、本軍の田口雄太郎、遊軍の長田健三、おもはず互に相顧みて微笑を浮べながら、愉快ですなア、

「面白いね、いかにも面白いよ、堂々たる言論は新聞と演説とに任せて置いて、本軍の攻撃態度が活動寫眞とは奇抜だ、よほど振るツてるよ、しかし田口といふ男は君、思ひ切ツた人間だね、これがため數萬の財産を投じたといふこツたぜ」  
 「だらうなア、兎も角も六箇月間も常設館を無代で見せるんだもの、事に依ると田口

だけの財産ぢやア足るまい、きツと外にも軍用金を注ぎ込む人間が居るんだぜ、あの勢ひで押されちやア流石の豪傑婆も、あツと驚いたらう、今後また何を始めるか知れないからねエ、はゝゝゝ時に君、見たかい」

「見たとも、代價を取る取らないに拘はらず、いやしくも我々今日の男子たるもの、義理にも見ざるを得んぢやアないか、僕の鼻アなんか、嫌だといふのを無理に引ッぱり出してやツたが、いやはや、ぎツしりと爪も立たない、四箇所とも満員々々の札を掛け通しだ」

「生ける女の聲が、いくら高くツても、あの凄じい景氣ぢやア、揉み潰されるぜ、はゝゝゝ」

「第一また寫眞が面白く出来てるよ、いつの間に君、どこで俳優を募ツたか、あらゆる婦人の缺陷を種々の方面から巧に組み立てた作者が君、うまい上に活辯先生の無

遠慮な説明が實に痛快だ、しかし營業的の活動には、不意の損失だよ、頗る手痛く響いたらうなア」

「ところが君、妙なもんだぜ、今度あれがため營業的の活動も却て繁昌するさうだ、おまけに君、どこも彼所も多少、女子攻撃のヒルムがないと客足が尠いさうだよ、時に勢ひといふものは怖ろしいもんだね、一面また婦人の見物が減るだらうと思つたのは案外で、現に君が細君を強ひて引ッぱり出したと同じ理窟だ、あれを見ない女ア自分の良心に恥ぢて見られない事があるからだといふ聲に驅り出されてね、寧ろ一種の反抗心を帯びた申譯的に、どしどしやツて来るさうだよ、いかにも男子俱樂部は、うまい急所を衝いたね、おどんと一發、たしかに婦人倶楽部の參謀室へ命中したぜ」

「しかし藤原秀子といふ婆アさん、なかくの奇策縦横で、たゞの娘が古くなツた女

と違ッてるさうだからね、まさか此まゝ口を開いて見物しても居まいよ」

「さアそこだ、どういふ工合に逆撃するかね」

「だが面白い世の中に、なッて来たな」

「どうだい、此際、田口雄太郎と藤原秀子の寫眞を兩關に男女おのゝ幹部の顔を其下へ出して、これに簡単な履歴を付け加へた一枚刷にすりやア、賣れるぜ、儲かるぜ」

「はゝゝゝ無論、もう君、そんな事を如才なく考へて、既に取り掛ッてる奴があるかも知れないよ」

「なるほど、あるだらうなア、今日の社會、これほどの呼物は無いんだから」

いはゆる晴れの檜舞臺でなく、かくれたるヒルムに上りて而して後、始めて世間の看

客に見ゆる活動寫眞の俳優、こゝに集まりて十餘人の下稽古、

男子俱樂部より出張せる監督二人、すべての顧問を兼ねし作者一人、離るべからざる

活辯先生四人これに参加し、當面の俳優いづれも書拔を呑み込んでの大車輪、

監督まづ口を開いて、

「さア諸君、いよく明日はヒルムに入れますぜ、いふまでもなく、下稽古から本氣に遣ッて下さい、普通一般の營業的でないだけに、猶更技藝の上の熱心を願ひます、辯士さん、よろしいかね」

活辯先生、いかにも得意満面、

「よろしい、僕の方は十分ですが、やはり俳優諸君に筒一ぱい張り上げて貰ひませう、でないよ、呼吸が違ッて困りますからね」

背景其他の道具一切を廢し、衣裳と鬘だけ眞物の俳優、おのゝ自己の持役を引き受